

[025]言語文化叢書：英国学術渡航学生の準備作業 ：ケンブリッジ大学英語・学術研修事前研修ガイド ：類似研修の参考にも

鈴木，右文
九州大学大学院言語文化研究院

廣田，稔
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7378124>

出版情報：言語文化叢書. 25, 2025-08-22. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



第2部 研修参加者の発展学習

ー受入先ケンブリッジについての専門的知識ー

廣田 稔

第2部では、受入先ケンブリッジ大学に関し、研修創設者である私が九州大学退職後に着任した福岡女学院大学大学院教授時に執筆した拙稿を紹介します。

第1稿 「英国の風土と知的空間 ケンブリッジーガウンの群像(I)」

『比較文化:福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』1号 pp.83-105

第2稿 「英国の風土と知的空間 ケンブリッジーガウンの群像(II)」

『比較文化:福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』2号 pp.37-59

第3稿 「Good-bye, Mr. Chips と The Leys Schoolー作品と作品のモデル考ー」

『比較文化:福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』5号 pp.33-68

転載: 掲載元福岡女学院大学大学院人文科学研究科に対し転載許可について感謝申し上げます。

訂正: 第1稿 p53, 8行目「講義」>「抗議」/p54, 19行目「故国へ」>「故国を」/p56, 下から2行目「見」>「身」/p61, 4行目ダーウィン生没年は(1809-82)/p68, 15行目「共に」>「長時間」/p70, 1行目「見」>「目」

第2稿 p73, 本文9行目「地勢状」>「地勢上」/p90, 「兵士」の3~4行目間「イギリスが産み造り意識させ、」挿入/p90, 「兵士」の最終行「永遠の心の中に運び携え」>「いずこへか祖国に伝え戻し」/p91, 12行目 Steven>Stevenson/p91, 21行目「ステイーヴン」>「ステイーヴンソン」/p93, 1行目「ピンクの花」>「ナデシコ」/p93, 16行目「ファウ」>「ファウヌス」/p.93, 20行目「眠だけな」>「眠たげな」/p95, 註45は削除

第3稿 p.96, 本文10行目及びp130和文6行目「殆んど」>「殆ど」/p118, 引用1行目 pleasures>pleasances

これらは、ケンブリッジ大学全般に関する論考、及びケンブリッジに存在するパブリック・スクール・リース校をモデルにケンブリッジ大学出身の作家ジェイムズ・ヒルトンによって描かれた英国パブリック・スクール物語の代表的名作 *Good-bye, Mr. Chips* 論です。英国の教育精神の伝統理解への一助となれば望外の幸せです。なおこの度の機会に鑑み、上記拙稿に加え、新たな書きおろしとして、ケンブリッジ大学 Pembroke College (1347年創立) 輩出の偉人に関し、一文を記します。これらから成る本章の願いは、研修の場が世界有数の場であること、それにより研修が意義深いものであることを皆さんに認識していただき、この歴史ある学寮での学びの経験が将来の飛躍への原動力のひとつとなることです。

<Pembroke College ゆかりの偉人たちについて>

Pembroke College について考える時、拙稿で記した他学寮と同様、各分野における輝かしい歴史的人材を輩出していることをまず記さねばなりません。簡潔に名を記せば、英詩の「詩人の中の詩人」と仰がれる *The Faerie Queene* (1590, 1596) の作者 **Edmund Spenser** (c., 1552-1599)、英詩史上エレジー「哀歌、挽歌」の最も代表的名詩『墓畔の悲歌』“Elegy Written in a Country Church Yard” (1751) の詩人 **Thomas Gray** (1716-1771) [因みにこの詩は我が国でも明治 15 年『新体詩』誌に矢田部尚今 (1851-99) による訳「山々かすみりあひの鐘は鳴りつつ野の牛は」の出だして始まる『グレイ氏墳上感懐の詩』と題していち早く紹介された] などです。グレイの名詩はあまりにも有名なので、その第1連の原文を参考のため記しておきます。

The curfew tolls the knell of parting day,
The lowing herd wind slowly o'er the lea,
The plowman homeward plods his weary way,
And leaves the world to darkness and to me.

晩鐘、暮れ行く日を弔いて鳴り渡り
牛の群れ、鳴き声低くのろのろとくねりて野を進み
農夫は疲れた足してとぼとぼと家路を辿り
この世を暗闇と私とにゆだねゆく。

人材はさらに、James I 世の勅命を受け、オックスフォード、ケンブリッジの 47 名の学者たちを率いて『欽定英訳聖書』として世に知られている近代英語を画する聖書翻訳の大業 *The Authorized Version* (1611) を成した **Sir Lancelot Andrewes** (1555-1626)、そして近くは桂冠詩人 **Ted Hughes** (1930-1998) 等と続きます。

この College はまた、**William Pitt** (1759-1806) の出身学寮です。若冠 24 歳にして歴史上英国最年少の宰相となり、トラファルガーの海戦でネルソン提督が旗艦 *Victory* 号によってナポレオン軍を破った時の首相でした。彼の銅像をコレッジ図書館前に見ることができます。

コレッジ正門右奥にある College Chapel は、ロンドン St. Paul 大聖堂を建築した英国最大の建築家 **Sir Christopher Wren** (1632-1723) による彼の

第1作の歴史的建造物として重要なもので、Wren Chapel と称されています。

また、パブリック・スクールの名門イトン・コレッジを創設したヘンリー6世は、Pembroke College に大いなる愛着を示し、自らの “adopted daughter” と呼び、この学寮に土地を与える憲章の中で「大学のすべての中でまばゆく輝き、また輝いてきた著名にして最も貴重な学寮」¹と述べています。このコレッジにはヘンリー6世の賛美にたがわない美しい庭園も存在しており、かつて Thomas Salmon は 1748 年コレッジの庭園について以下のように記しています。

[The] Garden is large, well laid out, full of Fruit, and has a good Bowling-green in it. The North of the Garden, which is very long, and reflects the warm Rays of the South Sun, makes the Walk which runs parallel to it the best Winter Walk in Town.²

庭園は宏大で見事に設計され、果実多く立派な芝の球戯場をその中に備えている。長々と続いて南から太陽の暖かい光線を映し出す庭園の北壁は、この壁に並行して続く散策の道を街中で最高の冬の歩道となしている。

このコレッジ奥北側の散歩道は、**Nicholas Ridley** に因み、“Ridley Walk” として今日も残されています。彼は 16 世紀の学寮のマスターで、当代英国第一の聖職者と目されながら、Bloody Mary として知られる Queen Mary (1516-58) の不興を買い、ロンドン塔に送られた後 1555 年 10 月 16 日 Oxford にて火刑に処せられました。肖像画がコレッジのダイニング・ホールの暖炉のすぐ右隣にあり、あたかも暖炉の火で燃やされる程近くに掲げられていますが、まさしく火刑に処せられたこの聖職者を偲ぶに相応しい場所と考えられているようです。

ダイニング・ホールの左側壁には大詩人エドモンド・スペンサーの肖像も掲げられていて、ホールでの食事の折は日々この肖像画を見上げられる位置に坐したことを懐かしく思い起こします（現在は他の場所に移されています）。ダイニング・ホールは日常、学生、コレッジ教授、職員の食事場であり、一番奥の一段と高くなったテーブルの並びは、厳粛かつ華麗なハイテーブルの席です。

このような学寮の中央部、古くは Ivy Court と称されていたコレッジ・ダイニング・ホールに接する右側隅2階に、詩人トマス・グレイがその半世を過ごした部屋

¹ John Curtis, *Cambridge* (Whitefriars, Norwich: Jarrold Publishing 2000) p56.

² *ibid.*, p54.

が現存します。今日 Thomas Gray Room として保存されているのがそれです。室内に掲げられているのは、詩人の2枚の肖像画、詩人畢生の名作『墓畔の悲歌』の作詩の場であるバッキンガムシャーの小村 Stoke Poges の St Giles 教会とその墓地 [그레이의 墓もあります] を描いた小さな絵、그레이の友人でその遺産管理者となり “Elegy” の詩人直筆のいわゆる Pembroke 草稿をコレッジに残すことに寄与し自らも詩人であった William Mason の肖像画、さらに 그레이の亡き後にこの部屋を用いた宰相ウィリアム・ピットの肖像画です。

このコレッジに遥かに思いを馳せる時、その奇しき佇まいを思い起こさせてくれる詩があります。これはトマス・ 그레이がケンブリッジに先立つ彼の母校イートンを詠じた『イートン学寮遠望の賦』の一節で、直に Pembroke を描出したものではないものの、この詩は詩人が半生を過ごした Pembroke に通じる感慨の詠唱ともみなし得るものという感があり、この学寮を訪れ経験する若者たちに幸せと希望につながる何かを授け続けてくれるものと思わずにはいられません。

Ye distant spires, ye antique towers,
That crown the watery glade, ...
...

Ah, happy hills, ah, pleasing shade ...

As waving fresh their gladsome wing,
My weary soul they seem to sooth,
And redolent of joy and youth,
To breath a second spring.

汝ら遥かなる尖塔よ、汝ら古の塔よ、
水の流れの森木立の上に聳えて・・・
・・・

ああ幸せの丘よ ああ楽しき木陰よ・・・

汝らのさわやかな喜びの翼をはばたかせて
私の疲れた魂を慰めてくれるように思えるのだ
そして青春の日の喜びをしのばせて2度目の春に
息吹を与えてくれるように思えるのだ

筆者にとって Pembroke は2度目の春のみか 20 回もの夏の日の喜びと幸せを授け与えられた崇敬この上なく仰ぎ見る学寮であり、かの詩聖ワーズワースが彼の学寮セントジョンズ・コレッジを「セントジョン、わが守護神」と讃えた言葉を借りれば、「Pembroke わが守護神」と賛美したく感じるのです。

ケンブリッジ大学のコレッジ中三番目に古いこの歴史と伝統の Pembroke College について到底全てを語り尽くせるものではないのですが、結びに、このコレッジの日本人にとって忘れ難く興味深い史実を付記したいと思います。ケンブリッジ大学の他コレッジに学んだ例は、クレア・コレッジに学んだ白洲次郎その他数多くありますが、Pembroke にはかの三菱財閥創設者岩崎弥太郎の甥で、三菱を大企業となした岩崎小弥太が留学したことが特筆すべきことでしょう。

そしてケンブリッジではなくロンドン大学に留学した夏目漱石ですが、この文豪が英国に到着したばかりの時、Pembroke を訪れたことが知られています。1900年(明治33年)11月1~2日の2日間のことです。漱石が知人への手紙に記しているように、留学地選定にあたり、オックスフォードをも候補に含めた中でケンブリッジを真っ先に訪ねるのでしたが、既に Pembroke には東京専門学校(早稲田大学の前身)からの最初の留学生として、後年の実業家、田島(浜口)担がいて、漱石は紹介されていた Andrews 氏宅に宿泊した翌日、「十一月二日(金)、田島氏ノ案内ニテ Cambridge ヲ遊覧ス³」と記しています[因みに大英博物館嘱託でもあった著名な博物学、生物学、民俗学者、南方熊楠は日記(1899年3月20日)に「田島 Pauton Street, Cambridge⁴」と田島の住所を記していますが、Pauton は正確には Pantan]。今日も Pembroke から徒歩で10分程のこの場所には、コレッジ所有の学生用フラットが現存しています。漱石には、後年朝飯にうずらを食べる話の中で「朝飯の御馳走にはケムブリッジに行ったとき ^{たしか} 恠 浜口君に呼ばれた事があると云ふ記憶がぼんやり残ってゐる…⁵」という思い出もあり、この偉大な漱石も可能ならケンブリッジ、それも Pembroke に留学を望んだかもと察せられます。しかしケンブリッジに留学したとすれば年400ポンドから500ポンドと漱石は書いているので、文部省から給付を受けた学資金年額の2倍程度にも相当しており、漱石はケンブリッジ留学を断念してロンドン大学を選ぶことになったと推測されます。いずれにしても Pembroke がかの夏目漱石さえも心を寄せたコレッジであった可能性を思えば、今日この由緒あるコレッジを研修の場として与えられていることの得がたさに思いを致したいものです。

³ 小山 騰^{のぼる}『破天荒<明治留学生>列伝』(講談社)p186.

⁴ ibid., p187.

⁵ ibid., p186.

英国の風土と知的空間

ケンブリッジ——ガウンの群像（Ⅰ）

廣 田 稔

大学の街（タウン）に対比してガウンは大学を象徴する。

ケンブリッジ大学セント ジョーンズ コレッジ (St. John's College 1511年創立) に学び、自ら『草屋詩集』を出したパトリック ブロンテ (Patrick Brontë 1777-1861) の 3 人の娘たち シャーロット (Charlotte), エミリー (Emily), アン (Anne) はそれぞれ代表作『ジェイン・エア』(1847), 『嵐ヶ丘』(1847), 『ワイルドフェル ホールの住人』(1848)によって、19世紀英国小説史上に特異な地位を築いた。このブロンテ姉妹についての文学論『ブロンテ姉妹の風景』の著者アーサー ポラード (Arthur Pollard) 教授は、その序の中で以下のように述べている。

「風景というものは、その中に人々が入るとただ単なる地形ではなくなるものだが、そうした人々がブロンテの姉妹たちともなると、その風景は地形を遥かに超えたものとなる。それは文学的風景となってしまふのである。しかしその文学はこの地形なしには十分に味わえないものであり、またこの姉妹たちの場合にあっては彼女たちの伝記の一部となっているのだ。彼女たちの作品を理解するためには、彼女たちの生涯を知る必要があり、彼女たちの生涯を知るためには、彼女たちが過ごした場所を知らねばならない。」^(註1) ブロンテの小説は英国北部湖水地方 (The Lake District) からさ程遠くはないヨークシャー (Yorkshire) の小さな石畳のある坂の町ハワース (Haworth) とその背後の荒涼とした広大な荒野がその舞台となって、世界的に有名となっている。それは時にもの寂しく暗い坂の上の教会と、数知れぬ灰色の墓

(註1) Arthur Pollard, *The Landscape of the Brontës* (London: Grange Books 1998) P.6.

石が並ぶその墓地、そして清楚な佇まいの牧師館、それらすべてと共にこの場所が悲しくも驚くべき才能の姉妹たちが、その生涯を過ごした場所であるからに他ならない。

『シャーロット プロンテ伝』の著者ギaskell夫人はハワースの風景を次のように描いている。

Right before the traveler on this road rises Haworth village; he can see it for two miles before he arrives, for it is situated on the side of a pretty steep hill, with a background of dun and purple moors, rising and sweeping away yet higher than the church, which is built at the very summit of the long narrow street. All round the horizon there is this same line of sinuous wave-like hills; the scoops into which they fall only revealing other hills beyond, of similar colour and shape, crowned with wild, bleak moors — grand, from the ideas of solitude and loneliness which they suggest, or oppressive from the feeling which they give of being pent-up by some monotonous and illimitable barrier, according to the mood of mind in which the spectator may be.^(註1)

この道を行く旅人のすぐ目の前にハワースの村は浮かび上がっている。村はかなり険しい丘の斜面に位置しているので、この村に着く2マイル先から見る事ができる。背後には薄暗い紫の荒野が長い狭い通りの頂上に建てられた教会よりもさらに高く盛り上がり、遙かに延びている。地平線は四方をぐるりとこの同じ起伏する波のような丘の稜線が取り巻いている。下方に沈む窪地の向こうにはまた同じ色と形の丘また丘が続き、その頂きは荒涼とした荒野である。この景色を眺める人の心の気分次第で、これらの丘が醸し出す寂しさと孤独感からすれば、壮大とも見え、ある単調で限りない障壁によって閉じ込められたような気持ちからすれば重苦しくもあるのだ。

(註1) Elizabeth Cleghorn Gaskell, *The life of Charlotte Brontë* (London: J. M. Dent & Sons, 1960) P.3.

作家の作品とその風景というこの種の思いはブロンテ姉妹だけのものではない。マーガレット ドラブル (Margaret Drable) の *A Writer's Britain—Landscape in Literature* ^(註1) はまさにこのような意識によって書かれた作品風景論である。筆者もポラード教授同様ハワースを幾度となく訪れ、四季折々の荒野の自然と向き合ってきた。北風吹きすさぶ冬の荒涼たる雪景色の中で『嵐ヶ丘』冒頭の北風の勢いに一方向にかしいだ数本のイバラの描写を想起する一方、夏の荒野を目の届く限り一面に覆うヒースのピンクがかった紫色の花を目の当たりにして、主人公の名ヒースクリフ (Heathcliff) 「ヒースの崖」こそは、いかに作品の主人公に相応しい象徴的名前であるかを思わずを得ず、この名前にこの偉大な作品の意味合いが凝縮されていることを知ることができるのである。20世紀を代表する作家ヴァージニア ウルフにあっては、その作品と風景とは切り離すことのできない意味合いを持っている。『燈台へ』*To the Lighthouse* (1927) にあっては英国最南西端 Land's End に近いコーンウォールの大西洋に臨む保養地セント アイヴス (St. Ives) とその沖合いに浮かぶ灯台の島がそうであり、*Mrs. Dalloway* (1925) にあってはロンドンの場所場所がそうである。19世紀ロマン派詩人、ウィリアム ワーズワスにあっては彼が生涯最も愛した彼の故郷、英国北部の山々とウインダムニア湖を初めとする数々の湖に恵まれた美しい湖水地方なくしてはその詩と詩の精神を理解できるものではない。作家や詩人の作品の背景となる風景はただ単に作品の舞台として重要であるばかりでなく、作品の象徴性と作家の思想と精神の風景であることを忘れてはならない。

この小論に於いて論じようとする Oxford と並び英国を最も代表する大学都市ケンブリッジは多くの著名な文人たちにとっての作品の風景の舞台であった。

ケンブリッジ大学はオックスフォードと並び称されて Oxbridge として世に知られ、両者は互いに the other place と言い交わし英国のみならず世界有数の学府としての歴史と伝統を誇っていることは改めて述べるまでもない。

(註1) Margaret Drable and Jorge Lewinski, *A Writer's Britain—Landscape in Literature* (London: Thames and Hudson, 1979)

1209年、オックスフォードで起こった暴動に端を発して「その暴動から一団の学者たちが逃れてこの地に落ち着いた」^(註1)ことがケンブリッジ大学の発祥の由来である。12世紀初めまでのオックスフォードに存在していた修道院の神学生が、国王ヘンリー2世とキャンタベリーの大司教トマス・ア・ベケットとの抗争の結果、パリ大学に留学の道を閉ざされたことが、オックスフォードに研究者集団が結集する原因となっていた。「神学生は教会法の管理下に置かれていたが、1209年市民を殺した神学生が国王の権限によって裁かれ処刑された事件」に「多くの神学生が処刑に講義してパリ、レディング、ケンブリッジに移住」したことになるものであったと言われている。^(註2)その17年後には教授と学生から成る団体が総長を長とする組織として、1318年、ローマ教皇によって Studium Generale として正式に認められることとなった。その間、最初のコレッジ、ピーターハウス (Peterhouse) がイーリーの大司教ヒュー・ド・バルシャム (Hugh de Balsham) によって1284年に創設された。

こうして、13世紀にまで溯る700年以上の古い伝統によって、その影響力は時代を超え歴史を超えて世界に及んでいる。米国ハーバード大学 (1636年創立) の由来を考えてみてもその名はケンブリッジ大学エマニュエル コレッジ (Emmanuel College 1584年創立) の出身者、ジョン ハーバード (John Harvard 1607-38, BA1632) に因んでいる。彼の姿はエリザベス I 世の廷臣としてその財務を預かった、サー ウォルター ミルドメイ (Sir Walter Mildmay) によって創設されたこのエマニュエル コレッジ正門の正面、芝のコートを隔てたチャペル祭壇に向かう左壁の上のステンドグラスに等身大にはめ込まれていて、憲章を手に携えたその雄姿を今日も仰ぎ見ることができる。このコレッジからも多数の者がアメリカ ニュー・イングランド (New England) の初期移住者となり、ハーバードはその一人であった。彼は1638年マサチューセッツ (Massachusetts) においてその生涯を閉じることとなるが、財産の半分を大学創設のために遺したことによって、この大学にその名が付されたのである。ハーバード大学がボストン近郊チャールズ川を隔てた地に

(註1) Michael Hall, *Cambridge* (The Pevensey Press, 1993) P.5.

(註2) 『イギリス文化事典』橋口稔編 大修館書店 2003年 P.38

あって、その名もケンブリッジ (Cambridge) と、英国ケンブリッジ大学所在地と全くの同名であることも興味深いことである。この地はアメリカの誇る工科大学MITとして知られるマサチューセッツ工科大学の所在地でもあり、米国学術の都である。ジョン・ハーバードはアメリカの新天地に自らの出身の英国のケンブリッジ大学と同じような大学の設立を夢見たものと思われる。思えばピューリタン達がイギリス南西部デボン (Devon) 州のプリマス (Plymouth) の港を出て過酷な航海の後、大西洋を渡りニュー・イングランド最初の植民地に辿り着いた1620年から僅か16年後のことであった。今日この米国の港町はマサチューセッツ州南東部ボストンからやや南に下ったその名も同じプリマスであり、Pilgrim Fathers が上陸した地点とされる場所に、ギリシア神殿を思わせる大理石づくりの神殿の聖域が設けられている。そこに、清教徒たちがその上陸に際し降り立ったと言われる踏み石が納められ、Plymouth Rock と記されている。筆者がこの地を訪れたのは1978年のことであったが、見事に復元されたメイフラワーII世号も係留されていた。筆者が英国のプリマスを訪れ、メイフラワー号が船出した岸壁を確認したのは2001年のことで、清教徒の到着点と出発点を逆に辿ることとなった。メイフラワー (Mayflower) は英国では五月に花咲く草木で別名をサンザシ (hawthorn) の花として、その純白 (紅色もある) の小さな可憐な花は、英国の春の野を飾る代表的な花の一つである。遠く故国へ船出する清教徒たちにとって、どれ程懐かしい故国を偲ばせる花であったことであろう。いかに望郷の思いが込められた船出であったことが察せられる。イギリスの五月は一年で最も美しい月であり、まばゆくまぶしい春の日差しに輝く月であり、May=hawthorn の花はイギリス人の心の象徴である。古来詩人がその花咲く五月の素晴らしさを歌にしたが『カンタベリー物語』の詩人チョーサーは既にケンブリッジの町の名をこの物語の中に記し出す一方、彼は次のように五月に寄せる一節を記している。

‘May, with alle thy floures and thy grene,
Welcome be thou, faire, fresshe May,
In hope that I som grene gete may’.

ああ、五月の神よ、ものみなすべての花と緑をたずさえて
美わしく、またさわやかな五月の神よ、よくぞおでましました。
私にもこの新緑を少しおめぐみ下さいますように。(註1)

チョーサーの『カンタベリー物語』「家扶の話」‘The Reeve’s Tale’に記されるものは、ケンブリッジの中心キングズ コレッジ (King’s College 1441年創立) チャペルの前のキングズ パレード (King’s Parade) からペンブローク コレッジ (Pembroke College 1347年創立) 前を通り、フィッツウィリアム美術館を過ぎて南に続く通りトランピントン (Trumpington) についてのものであり、このように記している。

AT TRUMPYNGTOUN, nat fer fro Cantebrigge,
Ther gooth a brook, and over that a brigge,
Upon the whiche brook ther stant a melle;
And this is verray sooth that I yow telle.(註2)

ケンブリッジからほど遠からぬトランピントンの通りに一つの小川が流れておりまして、その上に橋がかかっており、
その小川のほとりに粉挽き小屋が建っていたのでございます。
そして今私の語りますこの話はまこと真実の話でございます。

又、この物語には、エドワード3世が建てたキングズ ホールという建物の別名で現在はトリニティ コレッジ (Trinity College 1546年創立) の一部になっているソーラー ホールという大きな学寮についての話もある。そしてこのトリニティ コレッジのレン (Wren) ライブラリーに15世紀の folio 版の写本が遺されている。後年、詩人ワーズワスはその詩魂の形成史と称される『序曲』*Prelude* (1850) の中でチョーサーと、このトランピントンの粉挽き小屋について触れている。

(註1) Geoffrey Chaucer : *The Canterbury Tales* ‘The Knight’s Tale’, 1510-2.

(註2) ibid. ‘the Reeve’s Tale’, 3920-24.

Beside the pleasant Mills of Trumpington
I lough'd with Chaucer ; in the hawthorn shade
Heard him (while birds were warbling) tell his tales of amorous passion
(註1)

心地よいランピントンの粉挽き小屋の側で
私はチョーサーと共に笑った。サンザシの木陰で（小鳥のさえずり声の中）
彼が情熱の恋物語を語るのを聞いたのだ。

ワーズワス自身はセント ジョーンズ コレッジに入学したが、彼はケンブリッジでの学生生活について『序曲』第三巻'Residence at Cambridge'において綴っている。これは1787年10月から翌年の夏期休暇直前を扱ったものであり、詩人の17歳半ばから18歳までの学生生活についてである。ワーズワスは入学したセント ジョーンズ コレッジについてこう記している。

The Evangelist St. John my Patron was,
Three gloomy Courts are his; and in the first
Was my abiding-place, a nook obscure!

福音者聖ヨハネこそ私の守護神であった。
三つの小暗い方庭があり、その最初の方庭が
私の寄居する所。ほの暗い片隅であった。

このセント ジョーンズの自室に落ち着くに先立って、詩人はヨークシャーから、ハンティンドンというケンブリッジ郊外の広々とした平野を通り北西からケンブリッジに入ったのであり、ケンブリッジに入って初めて目にしたものが尖塔を聳えさせたキングズ コレッジのチャペルであったことを記している。それと共にガウンを見にまとい、房のついた帽子を被った学生の姿を目にしたが、それが彼がケンブリッジで目にした最初の学生の姿であった。

(註1) William Wordsworth, *Prelude* (1850) Book III, ll. 276-279.

It was a dreary morning when the Chaise
Roll'd over the flat Plains of Huntingdon
And, through the open windows, first I saw
The long-back'd Chapel of King's College rear
His pinnacles above the dusky groves.

馬車がハンティンドンの平らな野を転がるように進んで行ったのはもの寂しい朝であった。そして開いた窓から私は初めてキングズ コレッジの長い背を持ったチャペルがほの暗い木立の上にその尖塔を聳えさせているのを見たのである。

詩人はこの'long-back'd'を後に 'long-roofed'「長い屋根の」と書き改めている。そして次のように続けている。

Soon afterwards, we espied upon the road,
A student cloth'd in Gown and tassell'd Cap;
He pass'd; nor was I master of my eyes
Till he was left a hundred yards behind.
The Place, as we approach'd, seem'd more and more
To have an eddy's force, and suck'd us in
More eagerly at every step we took.
Onward we drove beneath the Castle, down
By Magdalene Bridge we went and cross'd the Cam,
And at the *Hoop* we landed, famous Inn.

そのすぐ後でガウンに身を包み、房のついた帽子を被った一人の学生の姿が行く手に立っているのが見えた。彼は歩み進んで行った。

私はこの学生を追い越して百ヤード後方になってしまうまで、その学生を目をこらして見つめていた。

この場所は私たちが近づくにつれて、ますます渦潮のような力を持っているように思われ、私たちが歩みを進める毎に、いよいよ激しく私たちを吸い込むのだった。

私たちは城跡の下を通り、モードリン橋にさしかかり、キャム川を渡り、そ

して有名な Hoop という旅宿で馬車から降り立った。

ここに言う城跡はケンブリッジの街の北 Castle Hill の上にあり、1068年にイングランド征服後僅か2年後にケンブリッジに来たウィリアム征服王が築いたものとされ、モードリン橋は Castle Street からケンブリッジに入る時、サミュエル ペピス (Samuel Pepys) ライブラリーで有名なモードリン コレッジ (Magdalene College 1542年創立) の前を通り最初に渡る橋である。この橋の下にかつて Granta と称されていたキャム川が流れている。

Dorothy Eagle と Hilary Carnell 編の *The Oxford Literary Guide to the British Isles* (Oxford Univ. Press, 1980) に挙げられているケンブリッジ各コレッジに学んだ主だった文人たちを概略拾い上げるだけでも約70人にのぼる。ヘミングウェイが名作 *For Whom the Bell Tolls* (1940) の題名をその Devotions の一節から採った17世紀前半の詩人・宗教家 John Donne (1572-1631) も、またシェイクスピアと同年の生まれでシェイクスピアが修行時代に最も影響を受け、シェイクスピア以前最大の劇作家であったクリストファー マーロウ (Christopher Marlowe 1564-93) もケンブリッジに学んだ。彼の部屋は彼が学んだコーパス クリスティ コレッジ (Corpus Christi College 1352年創立) の最も古いコートの一角に現存している。彼自らは *The Tragical History of Dr Faustus* (1604) という名作を世に送ったが、シェイクスピアの *Titus Andronicus* や *Henry VI* に手を貸したと考えられている。彼は残念ながらロンドン近郊の Deptford の料亭で、会食中に勘定の事から刃傷沙汰となり、その結果不慮の死を遂げる事となった。マーロウの悲劇の力強く美しい劇作に対して *To the Memory of Shakespeare* の中で 'Marlowe's mighty line' と讃えたのはベン ジョンソン (Ben Jonson 1572-1637) であったが、彼は完全な教育を受けなかったと言われながら上記 *Literary Guide* によればケンブリッジに学んでいる。彼もまた著名な劇作家、詩人として名を馳せ喜劇 *Volpone* (1606) を書いた。また *Every Man in His Humour* (1598) によっていわゆる comedy of humours (気質喜劇) の伝統の確立者としてイギリス演劇史に不朽の地位を築いた、シェイクスピアに次ぐ大劇作

家であった。『ガリヴァー旅行記』のスウィフト (Jonathan Swift 1667-1745) は「リリパットへの旅」の冒頭に次のように記してガリヴァーがケンブリッジで学んだことを記している。

My father had a small estate in Nottinghamshire ; I was the third of five sons.
He sent me to Emmanuel College in Cambridge, at fourteen years old,
where I resided three years,
and applied myself close to my studies;

父はノッティンガムシャーに小さな土地を持っており、
私は5人の息子たちの三番目であった。
父は私を14歳でケンブリッジ大学エマニュエル学寮に送り出し、
私はそこで3年を過ごし、学問に精励した。

又、諷刺家スウィフトに比して英国小説の写実主義の伝統を築いたとされるデフォー (Daniel Defoe 1660?-1731) は *Tour through the Eastern Countries* (1724) の中でケンブリッジに言及して、‘To any man that is a lover of learning, or of learned men, here is the most agreeable under heaven, ...’^(註1)「学問或いは学者を愛するどのような者にとってもここそ天の下で最も好ましい場所である」と記述している。

さて、1630年代清教徒たちがロード大司教 (Archbishop Laud) の体制の下で宗教的弾圧を受けた際、多くのエマニュエル コレッジの出身者も宗教上の自由を求めてアメリカへと渡っていった。トマス シェパード (Thomas Shepherd) もニュー・イングランドに移住した最初の100人の中の1人であった。この町は当初マサチューセッツ ニュー・タウン (New Town, Massachusetts) という名であったが、シェパードを記念してその出身地の名を取りケンブリッジと改められたという。これは新天地アメリカにおいて大学を創

(註1) Daniel Defoe, *Tour through the Eastern Countries* (1724) *In Praise of Cambridge* P.11.

設し、ケンブリッジ大学のような大学を育てようと理想に燃えていたジョン・ハーバードにとっても、新生ハーバード大学の所在地の名としてケンブリッジという名こそ最も相応しく思われたことは想像に難くない。以来ケンブリッジ大学エマニュエル・コレッジとハーバード大学との絆は今日に至るまで続いている。その一例がライオネル・ド・ジャージー・ハーバード奨学制度 (Lionel de Jersey Harvard Studentship) であり、毎年エマニュエル・コレッジ卒業生がハーバード大学で、またハーバード大学卒業生がエマニュエル・コレッジで学ぶために奨学金が与えられる形で残されている。時代を今日まで飛んで、20世紀に一例を取ってみても、ケンブリッジ大学教授フランシス・クリック (Francis Crick) と共に、DNA に関する「ワトソン・クリックのモデル」と呼ばれる生体における情報伝達に関する核酸の意義を明らかにするモデルを提唱し、1962年クリックと共にノーベル生理学賞を受賞したワトソン (James Dewey Watson) は、ケンブリッジで学んだ後ハーバード大学教授となった。ケンブリッジ大学旧キャヴェンディッシュ研究所 (Cavendish Laboratories) が所在した建物の一つの壁にはDNA構造の発見を記念する銘板がはめ込まれているのを見ることができる。

ケンブリッジ大学についてあまり知識のない者にも「万有引力」のアイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727)、『種の起源』のチャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin 1809-82) といった偉人たちが共にケンブリッジ大学であったと聞くほどこの大学を身近な存在となすものはないであろう。1661年トリニティ・コレッジに入学したニュートンは後に若干26歳にして有名な自然科学講座「ルーカス講座」の2代目教授に就任することになった (1669年) が、この「ルーカス講座」の教授職は長い伝統の中に受け継がれ、現在宇宙論のステイヴン・ホーキング (Stephen Hawking) 教授によって占められている。因みにこの自然科学の講座が設置されたのは「コペルニクスが『天球の回転について』を公にしてから120年後、ガリレオの死から数えて21年後」^(註1)の1663年のことであった。ニュートンが人類の宇宙観を変える発見をしたのはトリニティ・コレッジにいた時であった。フェロウとして33年間数学教授を務めた彼がコレッジが大疫病のために閉鎖されて、リンカー

(註1) 小山慶太『ケンブリッジの天才科学者たち』新潮選書 1995 P.14

ン州に帰郷していた時のことであったという。コレッジ正門に向かって右横に1本のりんごの木があるが、これはあの有名なリンゴの木の末裔と伝えられている。

Charles Robert Darwin (1909-82) は英国博物学者で1859年『種の起源』を著して進化論の確立者となったが、ダーウィンは詩人ミルトン (John Milton 1608-74) と同じクライスト コレッジ (Christ's College, God's House) として1436年創立後 Christ's College 1505年) の出身で1828年に入学した。ミルトンからほぼ200年後のことであった。彼はこのコレッジで受けた教育に刺激されて、自然史に深い関心を覚え、3年後南米と太平洋の調査に出たビーグル号に自然科学者として乗り込むこととなった。5年間の航海によって得た観察結果が後に進化論を生み、『種の起源』が書かれたのである。彼の次男ジョージ (George Harold) ダーウィンはトリニティ コレッジのフェローであり、天文学の教授として特に潮汐摩擦に基づく地球と月の潮汐進化論を展開した。この名門一族が住んだかつてニューナム・グレインジと称された屋敷は現在もキャム川沿いに残り、ケンブリッジ大学のコレッジ中、ダーウィン コレッジ (Darwin College 1964年創立) として、かつてのダーウィンの書斎も学生ラウンジとして使用されている。このダーウィン家のエピソードはチャールズの孫娘グウェン ラヴェラート (Gwen Raverat) によって *Period Piece : A Cambridge Childhood* に詳しく描かれている。この著者グウェンの弟チャールズは、父と同様にトリニティ コレッジで数学を学んでのちに物理学者となり、ケンブリッジ大学でクライスト コレッジのマスター (学寮長) となった。五人の子供たちもそれぞれ科学者になるという科学者一家であった。ジョージの死後、1964年にニューナム・グレンジを中心に隣家のオールド・グラナリー及びハーミテッジを組み込んで、コレッジが新設され、その名もダーウィン コレッジと命名された。グウェンの「妹マーガレットは優れた外科医ジェフリー ケインズと結婚したが、彼は文学と美術に関する造詣が深く、特にブレイク研究と書誌学の分野で知られている。」^(註1) この

(註1) グウェン・ラヴェラート 山内玲子訳 『思い出のケンブリッジ ダーウィン家の子どもたち』 秀文インターナショナル 1988 P.422

ケインズ家とのつながりは注目すべきであり、ジェフリーの兄メイナード ケインズ (John Maynard Keynes 1883-1946) は母校ケンブリッジ大学で貨幣、金融論を講じ、1919年パリ平和会議首席代表を皮切りに、第二次大戦中は蔵相顧問をも務めたかの20世紀を代表する近代経済学者である。第一次大戦後の英国の金本位制復活に反対して管理通貨制をその『貨幣改革論』によって提唱し、通貨管理の基準となる貨幣価値の基本方程式を示した「貨幣論」で注目された。1936年に出した雇用・利子および貨幣の一般理論で完全雇用のための画期的理論を展開した。その独創的な理論は米国のニューディール政策、各国の公共投資政策とも結びついて「ケインズ革命」といわれる大きな影響力を及ぼしたことはあまりにも有名である。このケインズは経済学のみならず文学、芸術にも関心を寄せ、ヴァージニア ウルフや E.M.フォースター等とブルームズベリー グループを形成した。このグループの中心的存在であったヴァージニア ウルフはケンブリッジ大学における講演を行う一方で、その実験的小説『ジェイコブの部屋』に於いてケンブリッジ大学キングズ コレッジの壮麗なチャペルについて描き出している。ケンブリッジがいかにか彼女の文学的空間に大きな意味を持っていたかを窺い知ることができる描写である。この一節にウルフは人間の崇高な栄光と叡智のシンボル、ケンブリッジ大学キングズ コレッジ チャペルへの限りない畏敬の念を寄せている。

ウルフはケンブリッジ大学の学生ジェイコブ フランダース (Jacob Flanders) を描く。‘Jacob Flanders, therefore, went up to Cambridge in October, 1906.’(註1) 「ジェイコブ フランダースはそれ故に1906年10月ケンブリッジに入学した」と。1546年創設のケンブリッジ大学最大の学寮トリニティ コレッジのネヴィルズ コートの最上階に起居するジェイコブがその階段を少し斜めに降りてくると、黒いガウンを翻した老教授たちに一人、二人、三人と出会う場面の描写がある。一人は壁の近くでふらふらとよろめきながら二階の自室に入って行き、一人は手を上げて柱や門や空を讃美し、また一人は学問一筋に、いかにも足早に歩いていく。するとそれぞれ三つの暗い部屋に明かりが灯される。

(註1) Virginia Woolf, *Jacob's Room* (London: The Hogarth Press, 1971) P.27.

If any light burns above Cambridge, it must be from such rooms ; Greek burns here ; science there ; philosophy on the ground floor.^(註1)

もしもケンブリッジの上空に明かりが灯るとすれば、
それはこうした三つの部屋からであるに違いない。
ここにはギリシア語が、かしこには科学が、そして一階に哲学が
輝いているに違いない。

高村光太郎の『智恵子抄』に描かれるように、光太郎の妻、智恵子にとって東京の空はなかったが、智恵子とは異質とは言え、同じような精神の苦悩の果てについにウーズ川に身を投じることとなったウルフにとって、ケンブリッジの空こそは、ことにキングズ コレッジ礼拝堂の上の空は英知輝く栄光の空と映っていた。

They say the sky is the same everywhere. Travellers, the ship wrecked, exiles, and the dying draw comfort from the thought and no doubt if you are of a mystical tendency, consolation, and even explanation, shower down from the unbroken surface. But above Cambridge — anyhow above the roof of King's College Chapel — there is a difference. Out at sea a great city will cast a brightness into the night. Is it fanciful to suppose the sky, washed into the crevices of King's College Chapel, lighter, thinner, more sparkling than the sky elsewhere?

Does Cambridge burn not only the night, but into the day?^(註2)

人は言う。いずこの空も同じだと。旅行く人たち、難船の浮き目にあった人々、流浪の民たち、そしていまわの際にある人々はそうした空への思いに慰めを与えられている。そして神秘的気持ちを抱く人々にとっては慰めと解き明かしとが途切れざる天空の表面から雨霞と降り下る。

(註1) ibid. P.38.

(註2) ibid. PP.29-30.

だがケンブリッジの上の空は、そのようなものとは一味異なっている。
 海上へと向かってこの偉大なる都市は夜の闇の中に輝きを投じている。
 キングズ コレッジ礼拝堂のさけ目の中に流れ込んだ空は他のいづこの空よりも軽く、
 希薄で、きらめきわたっていると想像するのは空想が過ぎるというのだろうか。
 ケンブリッジは夜ばかりか、昼の日中にも燃えさかっているというのではないのか。

ウルフにとって〈海上に向かって光を投じる〉というイメージは彼女の作品の大きな象徴的イメージであり、代表作に『燈台へ』*To the Lighthouse* (1927)というタイトルを付していることにもよく表れている。これは英国最西南端コーンウォールの保養地 St. Ives の沖合の大西洋に向かう入り江の中に浮かぶ燈台を、対岸の高台にあるタランド ハウスから眺めて構想され描かれた作品となっている。

ウルフにとってケンブリッジの空はこのように夜となく昼となく世界の隅々にまでその英知の光を投げ続けていた。

既に記したように、ニュートン、ダーウィンを初め、エラスムス、フランシス・ 베이コン、バイロン、ミルトン、テニスン、ワーズワス、コールリッジ、トマス・グレイ、エドモンド・スペンサー、ラザフォード、ケインズその他数知れぬ世界の偉人たちをケンブリッジの空は見守り続けてきたのである。ウルフはその中心に堂々と聳えるキングズ コレッジ チャペルに自ら生涯をかけて追求した「時間のうちなる美」を、詩人キーツ流に言えば「滅びなければならない美」を遥かに超えた永遠の美を讃美し、『波』*The Waves* (1931)のバーナードの言葉を借りれば「まさにこの瞬間にぴたりと符合する完璧な」一節として、以下のような礼拝堂内部の描写を記している。厳かに隊列をなして整然と行進する聖歌隊と、礼拝堂にステンド グラスを通して色取られた光模様、荘重な音色で響き渡るパイプオルガン、ものみなすべてが秩序立った礼拝堂の描写である。

Look as they pass into service, how airily the gowns blow out, as though nothing dense and corporeal were within. What sculptured faces, what certainty, authority controlled by piety, although great boots march under the gowns. In what orderly procession they advance. Thick wax candles stand upright ; young men rise in white gowns ; while the subservient eagle bears up for inspection the great white book. An inclined plane of light comes accurately through each window, purple and yellow even in its most diffused dust, while, where it breaks upon stone, that stone is softly chalked red, yellow, and purple. Neither snow nor greenery, winter nor summer, has power over the stained glass. As the sides of a lantern protect the flame so that it burns steady even in the wildest night — burns steady and gravely illumines the tree-trunks — so inside the Chapel all was orderly. Gravely sounded the voices ; wisely the organ replied, as if buttressing human faith with the assent of the elements. The white-robed figures crossed from side to side ; now mounted steps, now descended all very orderly. (註1)

見るがよい。彼らが礼拝堂に進み行く時、何と軽やかにガウンがなびくかを。まるで、その中に何一つ肉体の塊など納めていないかのように。大きな編み上げ靴がガウンの下に行進してはいても、彫像にも似た顔立ちは敬虔な信仰によって抑制されて何という確信と威厳に満ちていることか。太いロウソクは真直ぐに立っている。白いガウンの若者たちが立ち上がる。傍に控えたワシの聖書台は大きな白い本を開き読まれるために支え持つ。一枚一枚の窓をすかして光は斜めに寸分違わず平らな面となって降り注ぐ。このたち込めた塵埃の中でさえ紫と黄色をおびながら、その光は床石の上に崩れるとその石もまた赤、黄、紫と柔らかに染まる。雪も青葉も、冬も夏もこの古さびたステンドグラスを統べる力はない。カンテラの四方の覆いによってどのような嵐吹きすさぶ冬にも炎が護られてじっと燃えつづけるように — じっと燃えて木々の幹を厳かに照らし出すように — 礼拝堂の中はものみなすべてが秩

(註1) ibid., P.30.

序立っていた。声は荘重に響き、オルガンの音は賢くも応答し、あたかも人間の信仰を四大元素の同意を得て支えているかのようであった。白い衣の聖歌隊は端から端へと横切って、階段を昇り、また降り下り、ものみなすべてが秩序に極まっていた。

キングズ コレッジ チャペルはケンブリッジ大学で最も知られた建物で、ワーズワスはこれに3つのソネットを書いている。ウルフの描写するこの聖歌隊はサン サーンズ (Saint-Saëns) によっても賛嘆され、毎年クリスマスイヴには聖書に基づく9つの説教とキャロルのミサが全世界に放送されることによって世界的に知られている。チャペルはヘンリー6世が1441年の受難の主日に「聖母マリアと聖ニコラスのキングズ コレッジ」の建築のため礎石を築いたことに始まっている。ヘンリー6世はキングズ コレッジの礼拝堂が、ケンブリッジとオックスフォードに於て最も壮麗な建物とするように徹底させたと言われている。建築は1446年7月25日に着工され、王自ら基礎石を置いた。キングズ コレッジはOxfordのニュー コレッジ (New College) がパブリック スクールのウィンチェスター (Winchester) と繋がることになっていたことをモデルとして、同じく最も有名なパブリック スクールの一つイートン (Eton) と結びつながれた形として創設され、イートン卒業の学生は自動的にキングズ コレッジへの入学が許可された。当初キングズ コレッジには学寮長に加え、十二使徒聖人に因んで12名の貧困学生を置く予定であったが、ヘンリー6世はそれにキリストに直接選ばれた70名の初期福音伝道者に因んで、国王自ら創設したイートンから選抜された70名の学生を学ばせることとした。その後400年の間キングズ コレッジはイートンの卒業生のみを入学させるという特権が維持されることとなった。

「チャペルは新しいコレッジへのヘンリー6世の野心的な計画をすべて実現させるものであった」^(註1) オールド コート (Old Court) の建設の後に「王は自ら創設したこの新しいコレッジを元々の企画よりもずっと壮麗なものになすことを決め、ハイ ストリート (High Street) [今日のキングズ パレー

(註1) Michael Hall, *Cambridge, Pevensey*, 1995 P.44.

ド (King's Parade)』と川との間の広大な土地を購入し整地した。』^(註1) 工事は国王の石工棟梁レジナルド イーリイ (Reginald Ely) によって設計され、その後バラ戦争による工事中断、ヘンリー 6 世のロンドン塔での殺害などがあり、その後の国王エドワード 4 世崩御までの22年間の空白があったが、リチャード 3 世によって再開された後、ヘンリー 7 世、ヘンリー 8 世へと工事は受け継がれた。ヘンリー 7 世の建築家ジョン ワステル (John Wastell) が主として扇型天井の責任を受け持って、ステンド グラスを入れる作業、チャペル内の仕切りや木工の殆どがヘンリー 8 世の監督下1536年までに完成した。ヘンリー 8 世崩御の1547年、礎石が置かれて丁度100年後、キングズ コレッジ チャペルはヨーロッパで最も素晴らしい中世建築の一つとして認められることとなったのである。その結果ワーズワスの言葉によれば 'immense / And glorious work of fine intelligence' 「巨大かつ栄えある素晴らしい工知の業」^(註2) が今日にその堂々とした華麗な姿を見せているのである。

キングズ コレッジ チャペルがウルフにとって英知の光を夜となく昼となく世の隅々にまで投じていると映じ、この栄光のチャペルに魅せられたが、ウルフは大聖堂は世の人々を一つの共同体への一体化を誘うものであると考えていた。しかもその共同体とは偉人たちが寄り集って築かれたものであり、殉教者たちがその共同体に命を捧げたと考えられるものであった。彼女はセント ポール大寺院について『ダロウェイ夫人』の中でこう記している。'the cathedral offers company, he thought, invites you to membership of a society ; great men belong to it ; martyrs have died for it.' ^(註3) 「大聖堂は道連れとなってくれと彼は思った。一つの共同体への仲間入りへと招いてくれると。偉大な人々がその共同体に属するものなのだ。殉教者たちはその共同体のために命を捧げている」と。このセント ポール大寺院はキングズ コレッジ チャペルと置き換えて考えることもでき、チャペルがケンブリッジの英知の集う共同体へと人々をいざなう力を備えて、偉人たちにその栄光を

(註1) ibid. PP.44-45.

(註2) Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London : A&C Black) , 1995, P179.

(註3) Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* P.28.

担わせ、その栄光のためには殉教者としてケンブリッジに集う人々は命をも投げ出してきたと言い換えることも可能であろう。この殉教者のようにチャペルに魅せられてきた人々はあまたあったに相違ない。

そのような中に『エリア随筆集』で著名な弟 Charles Lamb と共に *Tales from Shakespeare* (1807) を書いた Mary Lamb はキングズ コレッジ チャペルを訪れた時の思い出をこう記している。

In my life I never spent so many pleasant hours together as I did at Cambridge....

I could live and die in them (colleges) and never wish to speak again.

And the fine grand Trinity College, Oh how fine it was!

And King's college Chapel, what a place!

I heard the Cathedral service there, and having been no great church goer of late years, that and the painted windows and the general effect of the whole thing affected me wonderfully.^(註1)

私の生涯において、ケンブリッジで共に過ごした時ほどに多く楽しい時間を過ごしたことはありません...私はすべてのカレッジの中で住み、死んでもいい、もう二度と声も発したくないと感じられるようでした。

そしてあの見事で壮大なトリニティ コレッジ、ああ、なんと見事であるか。そしてキングズ コレッジのチャペル、ああ、なんという素晴らしい場所であることか。

この大聖堂の礼拝の響きを聞くと、近年さしたる教会通いの者とは言いがたい私でさえ、

この礼拝堂とステンド グラスの窓、そしてそのすべてがもたらす雰囲気、素晴らしい感動を覚えずにはいられなかったのです。

このキングズ コレッジ チャペルの完成が、その後に創設されたトリニティ (Trinity¹⁵⁴⁶) 及びセント ジョーンズ (St. John's¹⁵¹¹) 両カレッジの基

(註1) Mary Lamb (1815) *In Praise of Cambridge* P.21.

礎作りに影響を与え、キャム(Cam)川沿いの土地整地が現在のバックス(the Backs)の始まりとなった。

キングズ コレッジ チャペルの北側にキャム川沿いに The Backs と称される広大な緑地帯が広がっている。キャム川にはケンブリッジ(Cambridge)の名の由来 Cam + bridge が示す通りいくつかの橋がかかり、そのそれぞれの橋がキングズ、クレア、セント ジョーンズ各コレッジへと導いてくれる。クレア橋はクレア コレッジへと続き、キングズ コレッジへ続く橋はアルフレッド テニソン (Alfred Tennyson) がその友人アーサー ハラム (Arthur H. Hallam) を偲んだ名詩、*In Memoriam* の中に歌う lime (ぼだい樹) の並木道があり、キャム川をはさんで眺める緑地帯の景観の中に建つ古色ゆかしい中世の学び舎の佇まいは筆舌に尽くし難い。

詩人マイケル ドレイトン(Michael Drayton 1563-1631)は、当時一躍ヨーロッパの最強国となった祖国の栄誉を讃えた彪大な長詩 *Poly-Olbion* (1612-22)『多幸の國』にケンブリッジの気高く栄光に満ちた様をこのように記している。

O noble Cambridge then, my most beloved Town,
In glory flourish still, to heighten thy renown.^(註1)
しかして気高きケンブリッジよ我が最も愛せし街よ
汝が名声を高めんために、更なる栄光に栄えたり

カレル ケイペク (Karel Capek) は *Letters from England* (1925) の中で‘Backs’を次のように記している。

I see the renowned ‘Backs’, i.e. the rear of the colleges above the River Cam,
Over which there are bridges leading to the ancient college parks ;
I float on the gentle river between the ‘backs’ and the parks.
I bow down to you, O Cambridge...^(註2)

(註1) Michael Drayton, *Poly-Olbion* (1622) *In Praise of Cambridge* (Bury St Edmund : The Alastair Press, 1988) P.10.

(註2) Karel Capek, *Letters from England* (1925) *ibid.*, P.9.

私はかの有名な「バックス」即ちキャム川の上のコレッジの裏手を見にするのだ。

川の上には古さびたコレッジ庭園へ続くいくつかの橋がかかっている。

私は「バックス」と庭園との間の静かな川の流に浮かび漂う。

ああ、ケンブリッジ、あなたに頭を垂れるのだ…

William Everett にも‘Backs’の美しさを描いた一節がある。

There is nothing of the kind lovelier in England.

The velvet turf — the ancestral elms and hoary lindens —
the long vistas of the ancient avenues — the quiet river —
its shelving banks filled with loiterers, its waters studded with a scene of
gay boats,

and crossed by light, graceful stone bridges; the old halls of grey or red
or yellow rising here and there — the windows peeping out from among
the trees, and the opening into the old courtyard with their presage of
monastic ease and learning —

the lofty pinnacles of King's Chapel o'ertopping all; — there is no such
scene of repose and of beauty in Oxford or any other place of learning....
I do not believe a single student ever paced under these ancient trees
without some word of praise bursting from his lips
for the beauty and glory of dear old Cambridge. (註1)

イギリスにこれほど美しい類のものは何一つない。

ビロウドの芝 — 愉の古木 — 古さびたぼだい樹、往古の長い並木の眺め —

静かな川の流れ — そのなだらかな勾配の土手は散策の人々に溢れ、
川面には賑やかなボートが一面に浮かび、明るい優雅な石の橋々が渡されている。

そこかしこには灰色、赤、黄色の古い学寮の建物。

(註1) William Everett, *On the Cam* (1866) *ibid.*, P.21.

— 窓は木立の中からのぞき、僧院のくつろぎと学問を偲ばせる古い内庭への入り口 — それらすべての上に高々と聳えるキングズのチャペル — オックスフォード

或いは他のいかなる学びの場所にもこれほどの安らぎと美しさの光景はない。……私はこれらの木々の下を歩いた学生にして、一人たりともあのいとしくも古き

ケンブリッジの美しさと栄光への讃美の言葉をその唇から発しなかった者があろうとは思えないのだ。

‘Backs’のぼだい樹の並木は夏には亭々と繁りキングズ、トリニティ、セント ジョーンズのそれぞれのコレッジ裏門よりコレッジ内へと続くキャム川にかかる橋まで、堂々たる並木道を作っている。ヴィクトリア女王 (Queen Victoria 1819-1901) はその *Diary* (1847) に、ある美しい夕暮れに夫君アルバート公 (Prince Albert 1819-61) と二人のプリンセスと共にセント ジョーンズの中を歩いたことを記している。

We walked through the small garden, and could not at first find our way, After which we discovered the right road, and walked along the beautiful avenues of lime-trees in the grounds of St. John's College, along the water and over the bridges.

All was so pretty and picturesque — in particular, that one covered bridge of St. John's College, which is like the Bridge of Sighs at Venice.... A lattice opened, and we could fancy a lady appearing, and listening to a serenade.^(註1)

私たちは小さな庭を違って歩きました。そして最初はどう行けばよいのか分かりませんでした。それからその道が分かってセント ジョーンズ コレッジの美しいぼだい樹の並木に沿って歩きました。流れに沿っていろいろな橋を渡りながら。

(註1) Queen Victoria, *Diary* (1847) *In Praise of Cambridge*, P.25.

すべてがとてもきれいで、絵のようでした。—ことにセント ジョーンズ コレッジの屋根に覆われた橋は。丁度ベニス「ため息の橋」のようだったのです。

……1つの格子戸が開きました。私たちは一人の婦人が姿を表して、小夜曲に耳を傾けているのではないかと想像したのです。

(以下 続刊)

英国の風土と知的空間

ケンブリッジ——ガウンの群像（II）

廣 田 稔

ケンブリッジ大学には現在31のコレッジが存在する。

Cambridge の著者 Michael Hall によれば、^(註1) その昔この地には新石器時代より人々の活動があったとされ、ケンブリッジという土地が重要性を持つようになったのは、ローマ人たちがこの地に到来したことによった。ローマの軍勢は今日キャム (Cam) 川として知られる川を渡り、ここに橋を掛けたとされる。この地はそれ以前より船の行き来可能な川によって、地理的にテムズ川の谷間からノーフォーク (Norfolk) 沿岸までを、そしてまた、イースト アングリア (East Anglia) からミッドランド (Midlands) とを結ぶ主要な線の間点となる要衝の地であった。またこの地は地勢状、荒涼とした北の沼沢地と南の深い森を避け通る唯一の道筋ともなっていた。加えて環状に流れる川と周辺の沼地はローマ軍の居留地を防備の点で護り易くしていた。現在、大学の考古学並びに人類学博物館にはローマ軍以前の遺物を見ることができる。ローマ軍がこの地の川に橋を掛けたのはコルチェスター (Colchester) からロンドンを結ぶ道路の一部となすためであった。‘Chester’とはローマ軍の camp (野営地、居留地) を意味する事は夙に知られている。因に London はローマ軍時代の Londinium に由来し、lond は古アイルランド語の “wild” を意味した。^(註2) こうして Durolipons と呼ばれたと考えられているローマ軍の宿営地は、キャム川の北側の土手、現在 Castle Hill と呼ばれる場所に拠点をおき、この場所をその砦となした。ローマ軍がこの地を去った後、ローマ軍の建物は朽ちるにまかされていたが、ケンブリッジの北方10マイル

(註1) Michael Hall, *Cambridge* (Newton Abbot: The Pevensey Press, 1995) 参照

(註2) Robert McCrum, William Cram, Robert MacNeil, BBC: *The Story of English*, (Tokyo: The Eihosha, 1986) p.21.

程の位置にあり、大聖堂で知られ国王チャールズ二世を処刑して共和制を樹立したオリヴァー クロムウェル (Oliver Cromwell 1599-1658) ゆかりの地としても知られるイーリイ (Ely) の修道僧たちが廃墟となった居留地跡に赴き、そこで一つの大理石の棺にイーリイ修道院の創始者、聖エセルドレダ (St. Etheldreda) を埋葬した。8世紀の終わりになって橋が再び掛け直されることとなり、この町は‘Grantacaestir’即ち〈グランタ川沿いの砦〉と称された。Granta とは Cam 川の別称である。875年による『アングロ・サクソン年代記』によれば、この町は‘Grantabrycge’と記されている。‘bridge’という語が英語で使用された最古の例の一つとされる。^(註3) このことによってこの町が橋によって知られ、橋があったために交易が進んでいたことが示し出されている。921年まではデーン人たちの支配下に置かれたが、エドガー王 (King Edgar) の治世下 (956-75) に於いて中世以前の繁栄の頂点にあったという。当時、この地は貨幣鑄造を行う市場町として知られ、ノリッジ (Norwich) やイプスウィッチ (Ipswich) といったイースト アングリアの中心的町と同じ重要性を持っていた。1010年、ケンブリッジはヴァイキングの襲撃を受け破壊されたもののこの町の復興は早く、1066年のノルマンディ公 ウィリアム (William the Conqueror 1027-87, 治世1066-87) による英国征服のかなり以前には既に再び栄えを取り戻していた。今日まで残る数多いサクソン人の墓石の石板が上質なものであることから、この町には豊かな富があったことが証拠立てられている。サクソン時代にはキャム川の両側に人々の共同体が栄えていた。Castle Hill に当時の統治の所在地があり、Peas Hill 並びに Market Hill の南側土手の人々の共同体が繁栄を見せていた。南側は多くの船着場があって、ケンブリッジに品物を運ぶ荷船を繋ぐよい設備があった。

1068年ウィリアム征服王はスコットランドのマルカム王 (King Malcolm) と和平を結び、南に下る途中ケンブリッジを訪れる。王はこの地域への権力強化のために現在 Castle Hill として知られる場所に城を築いた。元々、木による城で険しい丘の上に築かれたもので、現在もこの丘は残っている。この丘の頂きからは、四方360度にわたってケンブリッジの街並みのみならず、その向こうに続くケンブリッジシャーの田園を見渡すことができる。イースト

(註3) Michael Hall, *ibid.*, p.1.

アングリア地方の平坦な野とゆるやかな勾配で起伏する大地の豊かな広がり
を一望に収めることができる。街のほぼ中心にキングズ コレッジ チャペル
の東西に延びる雄姿が横たわる。詩人ワーズワスが故郷の湖水地方からケン
ブリッジに入学のためケンブリッジの街に入って初めてキングズ コレッジ
チャペルを目にしたのは、この地点からであったと考えられる。この時、想
像力豊かな青年詩人ワーズワスは尖塔を聳えさせている巨大なこの建築物に、
恰も角を持った巨大な動物の姿をも連想したと思われる。Ernest de Selin-
court 編による1805年版 *The Prelude* に詩人は‘The long-back’d Chapel’「背
の長い礼拝堂」と表現したことは既に先の論考で記した通りである。詩人は
長い動物の背をその屋根の形に連想したと推測される。この記述が同じく
Selincourt による1850年版では‘long-roof’d chapel’「長い屋根の礼拝堂」と
書き改められることになった詩人の描出の相違点をめぐっても筆者は論じて
いるので^(註4)、ここに改めて論じることは避けねばならない。

中世時代の大学は今日の様相とは大いに異なるものであった。当時、学生
たちは全て男子のみでずっと年令も若い14歳又は15歳でそれぞれの学科課程
を修め出していた。大学教育はその終わりまで7年間を要したが最後まで終
了出来る学生は少なかった。大学入学の必須科目は読み書き及び基礎的ラテ
ン語であった。簡単なラテン語は‘grammatica’「古典文献学」と称され
‘trivium’「中世の大学の七教養科目中の三学科（文法・修辞・論理）」という
初歩課程として主として将来教育に携わろうとする者を対象とするもので
あった。18世紀に至るまでこうした形が続けられた。中世期の終わりには、
これは学士号取得への資格試験的なものとなった。学士号取得が‘trivium’を
完成させるものであった。最終的に‘quadrivium’という学科課程があり、算術、
音楽、天文学及び幾何を修めることにより、修士号（Master of Arts）が資
格付けられた。その後、学生たちは神学、民法又は教会法を学ぶ権利を持ち、
これらの学問を修めることにより立派な報酬を得る職業を得ることとつな
がっていた。大学における居住資格を得るためには、学生たちはケンブリッ
ジ到着後15日以内に学寮長の大学入学許可のリストに登録されねばならな

(註4) 廣田稔「ワーズワス『序曲』第三巻‘long-back’d’から‘long-roof’d’をめぐって」九
州大学英語英文学論叢 第47集 1997年 pp.1～13参照

かった。最初の学生たちは通常の下宿屋に住んだが、徐々に学生向けの hostel が作られていった。この寄宿寮住まいの学生たちは個々に部屋代、食事代を払い、大学当局の教育指導を受けねばならなかった。こうして1284年最初のコレッジ、Peterhouse が Hugh de Balsham によって設立されることとなった。大抵の中世の学部生たちはコレッジ設立後も hostel に居住した。これはコレッジが当初主に学生に対して責任を持つことのない教師たちの共同体であったことによるものであった。しかし15世紀後半までには主として Winchester の大司教であった William of Wykeham が創設したオックスフォードの New College (1379年創立) に競う形で各コレッジは学生と教師が共に住まう共同体として設立されることとなった。そして今日まで続くコレッジ システムが確立されたのである。大学は教育を授け学位を授与する一方、コレッジは食事と部屋そして最終的に個人指導を提供することとなった。この個人指導はオックスフォードでは'tutorial'と称し、ケンブリッジでは'supervision'と称している。学生は個人指導教授 (tutor) の指導を受ける。コレッジはしばしば富裕な後援者によって設立され寄付を与えられた。

1275年、ケンブリッジに大学は土地を購入し、そこに Old School が建てられることとなり、最初のコレッジの創設時期に7つのコレッジが創設された。これらの中に後にクレア コレッジ (Clare College) となるクレア ホール (Clare Hall)、ゴンヴィル キーズ コレッジ (Gonville and Caius College) となるゴンヴィル ホール (Gonville Hall)、トリニティ コレッジ (Trinity College) となるトリニティ ホール (Trinity Hall) があり、マイケル ハウス (Michael house) とキングズ ホール (King's Hall) とがトリニティ レイン (Trinity Lane) とキャム川の間新しい大学敷地を形成した。中でもキングズ ホールが王室の寵遇を受けたことによって最も栄えた。1440年、この街の地勢を一変させることとなるが、それはヘンリー6世 (Henry VI) がキングズ コレッジのために敷地を獲得することに始まったものであった。新しい敷地はあまりにも広大なものであったので、当時の通りという通りが姿を消すという有様であった。これによって街全体の4分の1がかつての姿を消したとさえ言われている。しかし、キングズ コレッジの建設第二期 (1469-1594) に於いては街全体を荒廃させるものではなく、ヘンリー8世

(Henry VIII 1491-1547) によって最終的に一まとめにされた敷地は廃された宗教施設などを取り込んだものであった。この時期になるとコレッジは学者たちの住居としてのみならず教育施設として、又学生の寄宿施設と見做されることとなった。ケンブリッジは1441年のキングズ コレッジの創設と1546年のトリニティ コレッジ (Trinity College) の創設の間に大学は大きくなり、国際的な名声を得ていくこととなった。エリザベス女王の廷臣で大学総長であったセシル卿 (Sir William Cecil) が大学の新しい法令を設けて以来、それは300年の間変えられることはなかった。それは全ての学生はコレッジのメンバーでなければならないというものであり、それは今日も依然として守られている。

16世紀初頭には、ケンブリッジはヨーロッパのルネッサンスの影響を強く受け、過去数世紀に於いてはじめてカリキュラムにも広範な変革がなされた。文芸復興の先覚者として知られるオランダの人文学者エラスムス (Desiderius Erasmus 1466?-1536) は1511年から1514年の間ケンブリッジにあって、ギリシア語、聖書研究、そして中世学者必読のアリストテレス以外の他の古典作家を読むことを導入した。今日、エラスムスの部屋はクイーンズ コレッジ (Queens' College) 内に残されている。この当時までに創設されたコレッジは以下の通りである。

コレッジ	創立年
Peterhouse	1284
Clare	1338
Pembroke	1347
Trinity Hall	1350
Corpus Christi	1352
King's	1441
Queens'	1448
St. Catherine's	1473
Jesus	1496
Christ's (前の God's House を合併)	1505

St. John's	1511
Magdalene	1542
Trinity (King's Hall と Michael house を合併)	1546
Gonville and Caius (Gonville Hall を合併)	1559
Emmanuel	1584
Sidney Sussex	1596 ^(註5)

因にそれ以降の各コレッジの創立年代は以下の通りである。

Downing College	1800
Girton College	1873
Newnham College	1875
Selwyn College	1882
New Hall	1954
Churchill College	1960
Darwin College	1964
Lucy Cavendish College	1965
Fitzwilliam College	1966
Clare Hall	1966
Hughes Hall	1968
Wolfson College	1973
St. Edmund's House	1975
Homerton College	1977
Robinson College	1977 ^(註6)

上記の内 Darwin, Clare Hall, Hughes Hall, Wolfson, St. Edmund's House は大学院コレッジである。

The Oxford Literary Guide to the British Isles^(註7) 等を参照することに

(註5) Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London: A&C Black, 1995) pp.147-152.

(註6) *Cambridge Commemorated*, ed. Laurence and Helen Fowler (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989) p.373.

(註7) *The Oxford Literary Guide to the British Isles*, Dorothy Eagle and Hilary Carnell ed. (Oxford University Press, 1980)

よってイギリス文学史上に名を残した文人たちの中でケンブリッジ大学出身又はこの大学に係わる主だった文人たちを各コレッジ別に拾い見ることが出来る。

トリニティでは George Gordon Byron 6th Baron (1788-1824), John Dryden (1631-1700), George Herbert (1593-1633), A. E. Houseman (1859-1936), Andrew Marvel (1621-1678), Lord Alfred Tennyson (1809-92), 著述家 Charles Kingsley (1819-75), 詩人、児童文学者 A. A. Milne, 『金枝篇』で知られる人類学者 James G. Frazer, (因にトリニティは Sir Isaac Newton を初めとして科学者 Lord Rutherford, 哲学者 Bertrand Russell 又 Sir Francis Bacon (1561-1626) のコレッジでもある。)

キングズは *A Passage to India* (1924) や *Howards End* (1910) の Edward Morgan Forster (1879-1970), 戦争詩人 Rupert Brooke (1887-1915)。セント ジョーンズは詩人 William Wordsworth (1770-1850), 諷刺家小説家 Samuel Butler (1835-1902), 詩人 Robert Herrick (1591-1634), *The Castle of Otranto* (1765) の Horace Walpole (1717-97)。ジーザスは詩人 Samuel Taylor Coleridge (1772-1834), 作家 Laurence Sterne (1713-68)。コーパス クリスティは劇作家 Christopher Marlowe (1564-93), John Fletcher (1579-1625)。ペンブロークは *The Faerie Queene* (1590, 96) の Edmund Spenser (1552?-99), “Elegy Written in a Country Churchyard” の Thomas Gray (1716-71), James I 世の勅命を受け成された *The Authorized Version* (1611) の主たる翻訳者として知られる Sir Lancelot Andrews (1555-1626), 桂冠詩人 Ted Hughes。クライストは詩人 John Milton (1608-1678)。モードリンは『日記』(1660-69) で有名な Samuel Pepys (1633-1703) を輩出した。

宗教詩人 John Donne (1571-1631) そして劇作家 Ben Jonson (1573?-1637) もケンブリッジから名誉学位を授与され, Honorary Fellow として Rudyard Kipling (1865-1936), 詩人 T. S. Eliot や Thomas Hardy の名も認めることができる。

このようにケンブリッジは英文学史上に名を列ねている文人たちをいかに多数輩出しているかを知ることができる。このような文人たちがケンブリッジ

の学生時代をどのように過ごし受け止めていたかを一、二の例で見ることも出来る。クライスト コレッジにおいて‘Domina, the Lady’〈クライストの貴婦人〉^(註8)という呼び名を与えられていた詩人ミルトンは、次のように記している。

「父は私をわが国にある二つの大学のうちの一つケインブリヂにやってくれた。ここで私は七年間、すべての不真面な所業をさけ、立派な人々に認められつつ、定められた通り学業と研鑽に時をすごした。そしてやがて、いわゆるマスターの学位を称讃の言葉とともに得ることができた」^(註9)
(平井正穂訳)

ミルトンがいかに勤勉な学生生活を送ったかが偲ばれる記述である。彼は年少の頃からこのように勤勉さを培っていたことは以下の言葉からも窺うことができる。これはミルトンがケンブリッジに入学する以前のものである。

‘From the twelfth year of my age I scarcely ever went from my lessons to bed before midnight. Then, when I had acquired various tongues and also not insignificant taste for the sweetness of philosophy, [my father] sent me to Cambridge.’^(註10)

そして後にギングズに学び教えた E. M. Forster は以下のように回顧する。

As Cambridge filled up with friends it acquired a magic quality. Body and spirit, reason and emotion, work and play, architecture and scenery, laughter and seriousness, life and art—these pairs which are elsewhere contrasted were there fused into one. People and books reinforced one another, intelligence joined hands with affection, speculation became a passion, and discussion was made profound by love.^(註11)

「ケンブリッジは友人たちで溢れていたもので、ここには魔術的な資質があっ

(註8) Graham Chainey, *A Literary History of Cambridge* (Cambridge: The Pevensey Press, 1985) p.44.

(註9) 平井正穂『J. Milton』研究社 昭和44年 p.48.

(註10) Graham Chainey, op. cit., p.44.

(註11) Martial Rose, *E. M. Foster* (London: Evans Brothers, 1970), p.12.

た。肉体と精神、理性と感情、学びと遊び、建築と風景、笑いと真面目さ、人生と芸術—他の場所では対照的なこれら1対のものがここでは一つのもので溶け合っていた。人々と書物とがお互いに補完し合い、知性が愛情と手を携え、思惑が情熱となり、議論は愛によって深淵なものとなされていた。」

1901年にケンブリッジに入学したフォスターにとって「ケンブリッジとイタリーとはフォスターの人生における主要な解放の経験であり、明らかに彼の書き物の中に映し出されることとなった。」^(註12)

1805年10月トリニティに入学した詩人バイロンがコレッジから実家の弁護士であり実務を預かる John Hanson という人物に宛てた最初の手紙にはこのように記されている。

I will be obliged to you to order me down 4 Dozen of Wine, Port — Sherry — Claret, & Madeira, one Dozen of Each; I have got part of my Furniture in, & beginning to admire a College Life. Yesterday my appearance in the Hall in my State Robes was Superb, but uncomfortable to my Diffidence.

^(註13)

このようにポート、シェリー、クラレットにマデイラというワインをそれぞれ1ダースずつ4ダースも注文してくれるように依頼し、家具の一部を運び込んでコレッジ生活の素晴らしさを味わい始めたバイロンは、気おくれして窮屈に感じながらも儀式用のガウンを身に纏い堂々とホールに姿を現している。いかにも貴族の出に相応しい華麗なまでの大学入学の始まりである。その後2週間も経ずして彼の異母姉妹 Augusta に宛てた手紙には次のように記している。

As might be supposed I like a College Life extremely, especially as I have escaped the Trammels or rather Fetters of my domestic Tyrant Mrs

^(註12) *ibid.* p. 13.

^(註13) Graham Chainey, *op. cit.*, p.110.

Byron… I am now most pleasantly situated in Superexcellent Rooms, Flanked on one side by my Tutor, on the other by an old Fellow, both of whom are rather checks upon my vivacity. I am allowed 500 a year, a Servant and Horse, so Feel as independent as a German Prince who coins his own Cash, or a Cherokee Chief who coins no Cash at all, but enjoys what is more precious, Liberty.^(註14)

「察しはつくと思うけれど僕はとてもコレッジ生活が気に入っている。特に僕の実家の暴君バイロン夫人の束縛或いはむしろ足かせから逃れたから…僕は今最高の特別室でとても居心地よく過している。一方の片側に僕の指導教授、もう一方に古老のフェロウに護られる形で、この二人共僕の浮かれ騒ぎにいささか歯止めを効かそうという訳だ。僕に一年に500ポンドが充てがわれ、召使が一人と馬がついている。だから自分専用のコインを造るドイツのプリンス並みにそれとも現金などといったものは何一つ造り出さないが、その代りそれよりももっと貴重な自由というものを楽しんでいるチェロキーインディアンのお酋長みたいに独立した気分を味わっている」

バイロンの言う‘Superexcellent rooms’は、コレッジの豪華な Neville's Court の北側の真中にある2階にあったと考えられているが、「貴族としてバイロンは教授たちの座るテーブルで食事を取り、金の房飾りの付いた角帽を被った豪華な刺繍のガウンを纏って風の吹き渡る方庭を足を引きずって歩いた」^(註15)と言う。

バイロンはまたここで後に近衛兵となる Edward Noel Long という友人と共に過した時期を‘the happiest, perhaps, days of my life’^(註16)と「人生の最も幸せな日々」と述べている。トリニティで学び親友となった二人はカム川に飛び込んでもぐる技を競い合ったことを記している。

(註14) *ibid.*, p.110.

(註15) *ibid.*, p.111.

(註16) *ibid.*, p.113.

Though Cam's is not a very 'translucent wave' it was fourteen feet deep, where we used to dive for, and pick up — having thrown them in on purpose — plates, eggs, and even shillings. I remember, in particular, there was the stump of a tree (at least ten or twelve feet deep) in the bed of the river, in a spot where we bathed most commonly, round which I used to cling, and 'wonder how the devil I came there'. (註17)

「キャム川の水はあまり「透明な水」ではなかったものの14フィートの深さがあり、そこで僕たちはもぐってそして皿や卵やシリング硬貨まで拾い上げていた。一わぎとそんな物を投げ入れた後で一僕が特に憶えているのは川底(少なくとも10フィート又は12フィートの深さがあったが)に一本の木の切株があつて僕はよくその周りにしがみついて「一体どうやってこんな所にやって来たのか」と思うのだった。」

このバイロンとロングとがもぐって泳いでいた場所は今日も残っている。ケンブリッジの町から2マイル南に位置する美しい小村グランチェスター(Grantchester)の森木立の中にある。キャム川の流れて沿ってその川沿いに緑の木陰の中に続く一本の footpath を辿っていくと、小道は Grantchester meadows と呼ばれる広々とした牧草地の中を抜け、その左手向うにグランタ(Granta)と呼ばれるキャムの支流の流れ、右手には広大なケンブリッジ郊外の麦畑が広がっている。麦畑の境はサンザシ(May, hawthorn)やブラックベリーの生垣で区切られて、小道はグランチェスターという名のかつてローマ軍の居留地でもあった村へと続いている。この村へはケンブリッジから'punt'と呼ばれる平底の小舟を操ってキャム川からその支流グランタ川の流れを辿ることもできる。バイロンとロングが泳いだ場所は Byron's Pool と称され、森木立の中に流れるグランタ川にその当時を偲ばせる。五月この川辺の小道にはサンザシの白い花が咲き乱れ、水面にその花の姿を映し出す。ここはチャーサーが『カンタベリー物語』の中で記していた『粉挽き小屋』

(註17) *ibid.*, p.113.

(註18) のあった淀みの場所から僅かに下流の場所であり、ワーズワスも『序曲』の中で「心地よいトランピントンの粉挽き小屋で私はチャーサーと共に笑った。サンザシの木陰で……」(註19) と詠じたように文学の豊かな香りに満たされている。

トリニティのレン ライブラリーの正面奥の中央に畢生の名作 *Childe Harold's Pilgrimage* (1812,'16,'18) を右手に抱えたバイロンの大理石の像は、コレッジ チャペル前室に立つプリズムを抱えたニュートンの立像と共に、トリニティを訪れ見る者にとって感銘深いものはないだろう。バイロンはケンブリッジにおいて既に *Hours of Idleness* (1807) を出版し、詩作に専念し、精力的に文学活動を行っている。1809年には *English Bards and Scotch Reviewers* を出しているが、これさえも彼の文学活動の一部でしかなかった。1809年10月 Miss Pigot という女性に宛てた手紙にはこのように記されている。

「僕は214頁の小説、2～3週間のうちに(匿名で) 註付きの380行から成る詩一篇、ボスワークフィールドについての560行の詩、6篇の小篇の詩の他に別の250行の押韻詩を書いています。」(註20)

このような文学活動の一方でバイロンは奔放な学生生活の一面を見せている。そのようなことの例として彼が一頭の熊を飼っていたという興味深いエピソードが残されている。バイロン自らこのように述べている。

'I have got a new friend, the finest in the world, a *tame* Bear, when I brought him here, they asked me what I mean to do with him, and my reply was "he should *sit* for a Fellowship."—Sherard will explain the meaning of the sentence if it is ambiguous.' (註21)

ここに見られるように熊など連れて来てどうしようというのだと問われた

(註18) Geoffrey Chaucer: *The Canterbury Tales* 'The Knight's Tale', l. 1511.

(註19) William Wordsworth: *The Prelude* (1850) Book III, ll. 276-7.

(註20) Graham Chainey, op. cit., p.116.

(註21) *ibid.*, p.116.

のに対して「親交」のためと答えたバイロンの真意がどこにあったか推測の域を出ないものの、バイロンは当時ケンブリッジに於てユークリッド幾何学や数学が重視され、文学や詩作が軽んじられていたことへの抵抗の意図もあったのではないかと察せられる。学期試験では数学の法則に弱い学生達は叱責される一方で、ユークリッド幾何学やスパルタ法については飛び抜けてはいてもマグカルタ憲章やシェイクスピアについては何一つ知ることのない学生たちを送り出している大学の実状を、バイロンは痛烈に揶揄する気持ちを表わし出して、熊を相手にすることの方が、このような望みない状況と向かい合うよりも願わしいという心況にあったことを示したのかも知れない。バイロンは数学は将来軍人になろうというのなら少しは役に立つかも知れないが他に意味はないものと考えていた。いずれにしてもバイロンは当初のケンブリッジの生活が人生で最高の時であるように言い述べながら、ある時はこのケンブリッジの学生生活の中で自暴自棄になる程の挫折感にも襲われていたように思われる。「僕のここでの生活は絶えざる浪費の日課なのだ……いまこの時も僕は頭の中にクラレット酒の一瓶を注いで、両目に涙をいっぱいためている」と記した。^(註22)

バイロンの死後 J. M.F. Wright はトリニティにバイロン卿が熊といた時のことに関して「卿は犬のように従う一頭の巨大な熊を引き連れて通りを歩いたが、その熊はこの(トリニティ)の塔の部屋の唯一の使用人だった」^(註23)と記している。

バイロンがロングとグランタの川の流れて水浴びに興じたのもこのような息抜きの瞬間の一つの表われであったかも知れない。このグランタ川の流れる美しい小さな村はチョーサーの頃から20世紀を代表するバージニア・ウルフを中心とするブルームズベリーグループに至る人々を引き付け、またイギリスが世界に誇る幾多の偉人たちを魅了してやまなかった村である。

このグランチェスターの村の中程に Grantchester Church があり、ほぼ1100年頃まで溯るこの教会の歴史もさることながら、このひなびた教区の教

(註22) *ibid.*, p115.

(註23) *ibid.*, p.115.

会にイギリス各地のみならず、世界の各国から人々が訪れて来るシンボルを認めることができる。それはこの教会の時計塔であるが、これこそはこの村をこよなく愛し、第1次対戦に従軍し夭折した戦争詩人ルパート ブルック (Rupert Brooke 1887-1915) によって記念碑ともなされた時計塔である。それはブルックの名を不朽のものとなしている名詩として名高い「兵士」(“The Soldier”) と共に美しく衷愁に満ちた珠玉の一篇「グランチェスターの古き牧師館」(“The Old Vicarage, Grantchester”) の最終二行の記述に描かれたことによる。

“Stand the church clock at ten to three?
And is there honey still for tea?”

「教会の時計は3時10分前を指しているのだろうか。
そしてまだお茶の蜂蜜はまだとりのけてあるのだろうか」^(註24)

ルパート ブルックは父 William Parker Brooke と母 Ruth Mary Brooke の二男として1887年8月3日ラグビー (Rugby) に生まれた。父はケンブリッジ King's のフェロウであり、パブリックスクールの名門ラグビー校の assistant master, School Field の housemaster であった。ルパートはラグビーでの教育を終えた後1906年ケンブリッジ大学のキングズ コレッジに奨学金を得、古典学を学ぶために入学した。彼の風貌を詩人イェイツ (W. B. Yeats) が “the most beautiful young man in England” 「イギリス一の美男子」と称し、ルパートと親交を結んだ伝記作家リットン ストレッチー (Lytton Strachey) がヴァージニア ステイーブン (Virginia Stephen—後

(註24) 「3時10分前」に関してはブルックは前行との詩の脚韻を踏ませるために (three と tea) このような形としたことが察せられる。これに関して1986年に「ケンブリッジ ニュース」に記事を書いた Lady Tansley はこのように述べている。「私たちが1907年にこの場所を訪れた時、時計は8時15分前で止まっていました。そしてそれは(1915年)ルパート ブルックの死までそのままだったのです。そしてその後敬虔な心遣いによって時計の針を3時10分にしてしばらくはそのままにされていたのです」と。1994年に漸く再度時計は動かされることとなった。(Grantchester Church, Grantchester Parochial Church Council 1988) p.7.

の Woolf) に宛てた1908年の手紙の中で“Rupert Brooke, isn't it a romantic name?”「ルパートブルックとはなんとロマンティックな名だろう」と記した、人も羨む美貌の青年であった。さしずめギリシア神話のナルキッソスとも思える美青年であった。かのチャールズ ダーウィン (Charles Darwin) の3人の孫娘の一人であったフランシス ダーウィン (後 Cornford) は、ルパートと詩と詩作法についてメモを取り交し合う仲であったが、ルパートに関する有名な4行の詩を次のように書いている。

A young Apollo, golden haired
Stands dreaming on the edge of strife,
Magnificently unprepared
For the long littleness of life (註25)

黄金の髪若きアポロは
闘争の縁べりに夢見つつ立ち
長い人生の瑣事には
ものの見事に疎かった

この美しき「若きアポロ」は生涯に僅かに小さな詩集一冊しか世に出すことなく27歳という短い生涯を閉じた詩人であったにも拘らず、ルパート ブルックの遺したものの人々に与えた感動は大きく、世の数多くの詩人たちにも増して輝きそのイメージはより大きく立ち現われている。1915年第一次大戦の最中、Gallipoli に向け航行中の仏艦上に於て、敗血症のために27歳の生涯を閉じた時、海軍司令長官 Sir Ian Hamilton はブルックがいかにかに不世出の詩人であったかその理由を次のように述懐して述べた。

「それは彼が英雄であったからなのか—英雄なら何千といた。彼が英雄に見えたからなのか。—そのように見える者は殆どいなかった。彼には天才的才能があったからなのか。—それなら他にもいた。だがルパート ブルックは神

(註25) Peter Miller, *The Irregular Verses of Rupert Brooke* (Kencot, Green Branch Press, 2003) p.66.

が授けたこれらすべて3つの賜物をその手に握っていた……」(註26)

ルパートはその死に先立って英国海軍の現役任務についていたが、1914年9月24日に時の海軍提督 Winston Churchill と食事を共にした後記した彼自身の言葉によるとこのようなものであった。

「僕は正確に言って陸軍に入隊したのではなく、海軍に入った—その方がもっとイギリス人らしいやり方だと思う—ウィンストンは僕に海軍小隊に任務を与えてくれた……僕は陸軍は軽蔑する。イギリスは海を支配しているのだ—」(註27)

ルパートの発病は Antwerp での作戦行動参加後、ダーダネルス海峡に送られた時のことであり、移された仏艦上で不帰の客となった。彼の亡き骸はエーゲ海スカイロス島のオリーブの木の下に埋葬された。時に1945年4月23日金曜日、それは奇しくもシェイクスピアの命日であり、またイングランドの守護聖人セント ジョージ (St. George) の聖日でもあった。このブルックの訃報を知らされた海軍大臣 (First Lord of the Admiralty) であった Winston Churchill は John Churchill 少佐に次のように打電したという。

「貴官の任務の許す限り余に代りルパート ブルックの葬儀参列に努められたし。彼の如きにはまたと会い難し」と。(註28)

チャーチルは1915年4月26日に『タイムズ誌』に追悼文を寄せ poet-soldier 〈戦争詩人〉としてのブルックを讃えた。

「彼は祖国イギリスの美わしさと偉大さを知る者として祖国のためにいさぎよく命を捧げた」と述べこのように記している。

「彼の遺した比類なき戦争ソネットの数篇に彼が托した思いは、人々が戦ったすべての戦いの中で最も苛酷で残酷、かつ最も報われ難いこの戦いに、決然としてまた意気高く赴かんとする何千という若者たちの相分ち合うものとなるであろう」と。(註29)

(註26) Milke Read, *Forever England* (Edinburgh: Mainstream Publishing, 1997) pp. 7-8.

(註27) The Rupert Brooke Society, Summer 2002, pp.16-17.

(註28) *Rupert Brooke-poet*. 1887-1915, p.5.

(註29) Mike Read, op. cit., p.246.

第一次大戦に従軍した所謂〈戦争詩人〉として讃えられる英国詩人たちの記念展がロンドン Imperial War Museum に於て「運命の若者たちに捧げる国歌—第一次大戦の12人の戦争詩人たち」と題して開かれた（2000年秋）折、Rupert Brooke は Edmund Blunden, Robert Graves, Wilfred Owen, Siegfried Sassoon 等と共に名を列ねた。そしてルパート ブルックの名を記した記念碑はウェストミンスター寺院の英国の最も著名な文人たちの眠る「詩人のコーナー」に掲げられ、彼の不朽の名詩「兵士」の一節はスカイロス島の彼の墓に、そして彼の母校ラグビーに円型の浮彫りの肖像の下に記されている。*The Sphere* 誌は「1586年におけるフィリップ シドニー以来、祖国の戦いの中で生命を捧げた英国で唯一人の評価に値する詩人」^(註30) と讃辞を贈った。

The Soldier

If I should die, think only this of me:
That there's some corner of a foreign field
That is forever England. There shall be
In that rich earth a richer dust concealed;
A dust whom England bore, shaped, made aware,
Gave, once, her flowers to love, her ways to roam,
A body of England's, breathing English air,
Washed by the rivers, blest by the suns of home.

And think, this heart, all evil shed away,
A pulse in the eternal mind, no less
Gives somewhere back the thoughts by England given;
Her sights and sounds; dreams happy as her day;
And laughter, learnt of friends; and gentleness
In hearts at peace, under an English heaven.

(註30) *ibid.*, p.246.

「兵士」

もし僕が死ぬようなことがあったならただこうとだけ思って欲しい。

とある異国の片隅に永遠の英国があるのだと。

その豊かな大地にはさらに豊かな土くれが埋もれているのだと。

かつてはイギリスの大気を吸って、愛でたきイギリスの花を咲かせ、

逍遙の道を作り、川の流れに洗われ、

故郷の日射しに祝福されてイギリスの体となった土くれが。

そしてこう思って欲しい。全ての悪を洗い清められたこの心は

永遠の心に脈打つ鼓動となって、

イギリスによって授けられた数々の思いを、

イギリスの風光とその調べを、幸せな日の幸せな夢の数々を、

そして友から学んだ笑い声と平和な

イギリスの空の下で人々の心に宿った優しさを、

永遠の心の中に運び携えていくのだと。

ルパート ブルックがグランチェスターにキングズを離れて宿所を得たのは1909年のことであった。このグランチェスターにブルックは月夜に月の光の中を小さなボートを漕ぎ出して、2～3マイルの川を下って行ったり、また色々な折を見つけて徒歩で出かけてはそこにある The Orchard というリンゴ園の Tea Garden で tea を楽しんでいた。この Tea Garden は1897年以来開かれたもので、それはたまたま Granta 川を平底のボートで漕いで来たある一人のケンブリッジの学生が、リンゴ園の所有者 Mrs Stevenson に友人たちと一緒にリンゴの下で tea を飲ませてもらえないかと頼んだことに始っていた。そして夫人が快く彼らをもてなし、学生たちが tea を飲みとても楽しく過ごしたことが、すぐに口伝えに広まることとなり、ケンブリッジのコレッジの学生たちに人気の場所となったという。しかしこのグランチェスターへの人気はその時点から始ったのではなしに、ここには既にその700年も前から、ケンブリッジの学者たちが徒歩で、ボートで或いは馬に乗ってこの魅力的で美しい村を訪れていたのである。The History of The Orchard という

この Tea Garden に備えられている小冊子にはこれまでこの場所を訪れて tea を楽しんだ著名人の名が記されているが、その多くが20世紀の世界の歴史に名を残している人々である。その幾人かを見ると、Bertrand Russell, Wittgenstein, Maynard Keynes, DNA の Crick and Watson, Rutherford, E. M. Forster, Virginia Woolf, J. B. Priestley, A. A. Milne, King George VI, Prince Charles, エベレスト登頂の Mallory そしてそれより先には「クロムウェル、ミルトン、ワーズワス、コールリッジ、ニュートン、ダーウィン、マーロウ、スペンサー」^(註31) といった人々がこの地を愛し訪れている。チョーサーもバイロンもであったことは既に記した通りである。

D. H. ローレンスはルパートについて「グランチェスターで日よけの下でパジャマ姿で詩を読んでいるギリシャ神だと彼のことを初めて聞いた」^(註32) と述べる。ルパート ブルックは、この Steven 夫妻の The Orchard につながるスレート葺き屋根の小さなコテージ風の家に2つの部屋を当てがわれ、庭の自由使用付きで週30シリングの食事代を払うことになる。部屋はつる植物の這う石のベランダに真直ぐに開いていて、小さな庭にはバラの花がいっぱいに咲いていた。「ここは素晴らしい場所だ」「僕はイチゴと蜂蜜を食べている」と彼は Hugh Dalton に書いた。そして従姉妹の Erica Cotteril には「僕はシェイクスピアに取組んで、一日中読んだり書いたりして時々森の中や川のそばを歩いている。僕は毎朝、そして時には月明かりの中で泳いで僕の食事(主に果物)を戸外に運んで行って日がな一日幸せに浸っている。」^(註33) と書き送った。

しかし1910年にはスティーヴン夫妻はルパートと友人たちが裸足で家の中に入ったり勝手な振舞いをするので、ルパートを The Old Vicarage の Neeve 夫妻にゆだねることとなり、ルパートはこの古い牧師館に居を変えることとなる。ルパートは「Neeve 氏は洗練された人で……頭にハンカチを被って蜜蜂の巣箱の近くに坐っている」^(註34) と記しているが、この Henry Neeve 氏は趣味で蜜蜂を飼っていて、蜂蜜はこの The Old Vicarage に隣接する The Orchard Tea Garden で売られていたのである。この〈蜂蜜〉こ

(註31) Mike Read, *ibid.*, p.78.

(註32) Mike Read, *ibid.*, p.247.

(註33) Rupert Brook — poet., *op. cit.*, p.3.

(註34) *ibid.*, p.3.

そ、最終行の「お茶の蜂蜜はまだ取りのけてあるのだろうか」という描出につながっている。ルパートがドイツへの旅に出た折に作ったこの詩が *Basileon* 誌に掲載された1と月後、旅から The Old Vicarage に戻った1912年7月のルパートを迎えた Mrs. Neeve との会話がエピソードとして残されている。

「ブルックが1912年7月に The Old Vicarage に戻ってきた時、彼はフローレンス ニューヴが彼の詩をバシレオン誌に見ていたことを知って喜んだ。「あのね。」と彼女はこの家での最初の午後のお茶の盆を運んで来て「まだお茶の蜂蜜はありましてよ」と言うのであった。その詩はバシレオン誌の6月号に出たばかりであった。」^(註35)

この詩は1912年5月ベルリンのカフェ デス ヴェステンズで書かれた。この詩を完成するとルパートはキングズのバシレオン誌の編集者にそれを急ぎ送り届けるが、それより先に‘A masterpiece on its way.’と電文を送った。この短い電文に〈傑作〉と称してはばからない自信が漲っていた。そして恋人のキャサリン コックス (Catherine Cox) にはこの詩を綴るに寄せて彼女への思いを込めてこのように書き送った。

「僕は丁度今君がグランチェスターにいるかも知れないと想像しているのです。君がひどく羨ましい。あの川とトチの木が僕にとっても呼び戻ってくるのです。芝の上でのお茶のことが。どうか僕に手紙を書いて下さい。そうすれば僕たちはそこで共に夏の日が過ごせるのです。」と。^(註36)

弱強四歩格という韻律によるこの詩はルパート ブルックのグランチェスターに寄せる郷愁に満ちた抒情性溢れる詩と結晶した。以下は筆者によるこの詩の抄訳である。

「グランチェスターの古き牧師館」

(1912年5月 ベルリン カフェ ヴェステンズ)

丁度今頃は僕の小さな部屋の前面にリラの花が咲いて、そして僕の花壇

(註35) Mary Archer, *Rupert Brooke* (Cambridge: Silent Books, 2001) p.34.

(註36) Mike Read., op. cit., pp.148-149.

にもカーネーションとピンクの花とが微笑んでいることだろう。そして花壇の縁べりに沿ってケシとパンジーとが花咲いていることも僕は知っている。ああかの地^(註37)ではトチの木^(註38)が夏を通じて、あの川の傍に緑陰のトンネルを作り、そしてその頭上には深い眠りがたゆたい、その下に神秘の川は緑の色をたたえて深く流れている。夢のように緑を滞りて、死のように深々と。—ああ何ということだろう。僕にはそのようなことが分っているというものに！そして僕は知っている。五月の野という野が黄金色に輝いている^(註39)ことを。そして日浅く甘く大気の匂う頃、水浴びせんと走る裸の足を、輝くばかりに金色に染めていく^(註40)ことを。……

僕はこんな所で汗にまみれ、胸も悪くなり暑さに身をほてらせている。そしてかの地では木陰の流れが水々しく裸の身を抱かんと寄り添うのだ。……そしてかの地では黄金の朝の下、露がやさしく降りている。……ああグランチェスターにありましかば、グランチェスターに。そこでは自然や大地やそれらのものに触れられもするものを。そして賢き現代の民人たちはファウヌス神が緑の中をすかして、のぞき見る姿を認め、(水の精)ナーイアスのひよる長い頭を見て、あるいはまた、山羊の足持つファウヌス神が、低く角笛を吹くのを聞いて、古典の神々は死に絶えてはなきことを感じるのだ。

だがこれらのことは今の僕には分らないこと。僕に分るのはただ一つのこと。日がな一日身を横たえて、ケンブリッジの空を眺めているかも知れないこと。そして眠りだけな草の中で花にあやされ、ひんやりとした時の流れに耳を澄ましているかも知れないことなのだ。すると幾世紀が融け合って、おぼろげにかすんでいく。グランチェスターでグランチェスターに……。すると今もなお夜明けの光に照らされた冷たい水の中で、幻の貴公子^(註41)がその淀み^(註42)を泳いで、ヘレスポイントの海峡で、はたまたステュクス神に久し

(註37) グランチェスター (Grantchester)。ケンブリッジ郊外約2マイルの距離にある。

(註38) 原文では 'Chestnut' となっている。'horse chestnut' のこと、いわゆる「マロニエ」のことで、上向きに房状の円錐型の花をつける。多くは白。紅色もある。

(註39) (註40) 五月にはケンブリッジ郊外の田園は一面見渡す限り菜種 (rapeseed) の花で覆われる。菜種畑に入ると足は黄色い花粉で染められる。

(註41) 詩人 Lord Byron

(註42) 淀み ('pool') はグランチェスターを流れるキャム川支流のグラント川が林の中に入った奥にあり、かつてこの場所はバイロンが泳ぎ Byron's Pool と称されている。

く学び会得した泳ぎの手を試し、技を試みるのだ。

ダン チョウサー^(註43)はいまもなお、いまもなお幻の水車小屋^(註44)の下でさざめく川の流れに耳を傾け、テニソンは眼を凝らして、ケンブリッジの流れのさまを見届けるのだ。そしてあの庭では、黒と白の縞模様に草の囁きが夜を徹して忍びよる……。

ああそうだ僕は荷造りして汽車に乗ろう、そしていまひと度イングランドに戻ることにしよう。というのも、イングランドこそ素晴らしい心を持つ人々が赴き行く所。そして、ケンブリッジ州こそ、イギリス広しと言えど物知る人々が赴く土地なのだ。そしてその地方の中でも、僕にはグランチェスターのあの美しい小さな村が好ましい。……グランチェスターは、ああグランチェスターは。かの地には平安があり、聖なる静けさがある。穏やかな空には大きな雲が浮かび、男も女も真すぐな眼差しをして、身も柔らかな子供たちは夢にも増して美しい。樹木生い茂る森、眠たげな川の流れ、そして黄昏の隅々を取巻いて、忍び寄るそよ吹くやさしげな風も半ば眠りにについている。グランチェスターの子供たちの肌は白く、日毎、夜毎に水浴びをする。女たちはなすべき務めを果たし、男たちは思想の掟を護る。彼らは善を愛し、真理を崇める。青春の日には声高らかに笑い、(老いを感じては立ち上がり、自ら銃を持ち果てると言う)……

ああグランチェスターに見てみたい。月影よぎる枝々の騒ぐ様を。胸騒ぐまでに甘くすえた匂いを、忘れ得ずして忘れ難い川の匂いを吸ってみたい。小さな木々の間ですすり泣くそよ風の音を聞いてみたい。ああ堂々と聳える愉の木立の群はいまもなおあの聖なる土地の守り神なのだろうか。トチの木は崇高な夢をむさぼって、いまもなお学問とゆかりなき川の水にその陰を投じているのだろうか。夜明けはひそやかで冷え冷えとした金と銀との水から生れ出た神秘の姿なのか。そして日没はいまもなおハズリングフィールドか

(註43) 原文‘Dan Chaucer’の‘Dan’は中世語‘dominus’ (L=lord, master) の短縮語である。Geoffrey Chaucer を敬意を込めてこのように呼んだと思われる。エドモンドスペンサーの *Faerie Queene* にある‘Dan Chaucer, well of English vndefyled’ (Book iv Canto ii. St. 32) からのエコーであろう。

(註44) ここにはチョーサーの『カンタベリー物語』‘The Reeve’s Tale’ l. 3923. にうたわれている水車小屋があったという。

らマディングレイまで黄金の海なのだろうか。そして日暮れて後、生れ出る夜に先んじて野ウサギが麦畑に顔を出すのだろうか。ああ川の流れの水は淀みの上にひんやりとした穏やかな茶色の水をたたえているのだろうか。そしてこの不滅の川はいまもなお笑いさざめくのか、水車小屋の下で水車小屋の下で。そして美の女神はいまもなおその姿を見い出されるのだろうか。確固たる姿としてまた静かなる類のものとして。深々とした牧草地もいまもなおあるというのか、虚実と真実と痛みとを忘れるために……ああ教会の時計台^(註45)はいまもまだ3時10分前^(註46)を指しているのだろうか。そしてお茶の蜂蜜^(註47)は、いまもまだとりのけてあるのだろうか。

この論考中のケンブリッジの街と大学の歴史的変遷に関する記述は特に下記を参照した。

Michael Hall, *Cambridge* (Newton Abbot: The Pevensey Press, 1995)

Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London: A & C Black, 1995)

The Oxford Literary Guide to the British Isles, Dorothy Eagle and Hilary Carnell ed, (Oxford University Press, 1980)

(註45) ここにはチョーサーの『カンタベリー物語』‘The Reeve’s Tale’ 1.3923. にうたわれている水車小屋があったという。

(註46) Grantchester Church. ルパートブルックが住んだ tea house (Orchard House) の目の前、道路一つを隔てて建つ。その塔の時計はルパートの戦死後この死を記念して3時10分にセットされた。(註24) 参照。

(註47) ルパートが Orchard House から移り住んだ The Old Vicarage の Mrs. Neeve が彼に用意してくれた tea 用の蜂蜜。

Good-bye, Mr. Chips と The Leys School

——作品と作品のモデル考——

廣 田 稔

英国に関する文化研究の一環として、英国の教育機構の中でも、伝統のパブリック スクールには大きな関心が及ぶところである。

筆者はパブリック スクールが英国文化研究の好箇の材料の一つであると認識し、著名な数校を多少とも垣間見ることがその基礎作業と考え、これまでイートン、ラグビー、ハロウ、ウィンチェスターそしてアイルランドとイングランドの間に浮かぶマン島にある、キング・ウィリアムズ カレッジを訪れている。

キング・ウィリアムズ カレッジは Dean Farrar による *Eric, or Little by Little* (1858) の作品の舞台であり、このカレッジが Roslyn School のモデルになっているものである。この物語は現在は残念ながら殆んど読まれることがない作品であるが、Dean Farrar and 'ERIC' の著者 Ian Anstruther の指摘によれば、この作品の前年に出された *Tom Brown's School Days* と共に「スクールボーイ物語の祖先としてこれらの作品がほぼ百年続くこととなったスクールボーイ物語流行のさきがけとなった」¹⁾ もので、パブリック スクール物語研究にとって欠くことの出来ない作品である。

イートンは事務長 Mr. Cross の案内で校舎内部も詳しく見る機会に恵まれ、僅かながら資料を得ることが出来た。イートンはナポレオン I 世をウォータールー (Waterloo) の戦い (1815年6月18日) で破ったウェリントン侯爵 (Arthur Wellesley, Duke of Wellington 1769-1852) の母校であり、彼の遺した言葉 "The battle of Waterloo was won on the playing fields of Eton" は人口に膾炙した名言である。又筆者の先の論考に記した『墓畔の悲歌』の詩人トマス・グレイ (Thomas Gray 1716-71) の母校でもあり、幾多の歴史上の人物たちを輩出している。Nigel Goodman による *Eton College* には以下のように記さ

れている。

「全てのイートン卒業生の中で最も有名な人物は恐らくウォータールーの戦いの勝利者にして後の首相ウェリントン侯爵であろう…。きら星の如く居並ぶイートン卒業生は世のよく知るところであり、ウォルポールと大ピットからマクミランとダグラスハイドに列なる総勢20名。これらと等しく感銘を与えるイートン卒業の作家たちはグレイ、シェリーそしてフィールディングからアルダス・ハックスレイとジョージ・オーウェル、そしてかの偉大なる経済学者ケインズをも忘れてはならない。」⁽²⁾

卒業生たちは卒業に際してトマス・グレイの名詩『イートン学寮遠望の賦』を贈られる慣わしと聞く。

YE distant spires, ye antique towers,
That crown the watry glade
Where grateful Science still adores
Her HENRY'S holy shade:
And ye, that from the stately brow
Of WINDSOR'S heights th' expanse below
Of grove, of lawn, of mead survey,
Whose turf, whose shade, whose flowers among
Wanders the hoary Thames along
His silver-winding way:

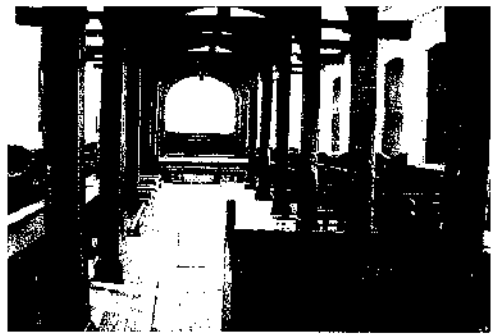
汝ら遙かなる尖塔よ、汝ら古の塔よ
水の流れの森木立の上に聳えて
ありがたき学問に励み 今もなお
ヘンリー王の聖なる御影を崇めているのか
そして汝らはウインザーの高台の威厳ある岩場から
眼下の森や芝や牧場を眺めやるのか
汝らの芝、その木陰 そしてその花々の中を
古きテムズは流れ行く 銀色に蛇行の尾を引きながら

これらの資料の中で英国の古書店で購入した John Rodgers による *The Old Public Schools of England* はロンドンの B. T. Batsford より出された1938年出版の書であり、英国パブリック スクールの数多くの古い写真が掲載された貴重な文献である。もう一冊 Brian Gardner による *The Public School - An Historical Survey* もロンドン Hamish Hamilton から出された1973年出版のもので、これ又最も初期の時代からの幾多のパブリック スクールに関する貴重な書物であり、英国パブリック スクール研究の資料として今後の考察に委ねねばならない。

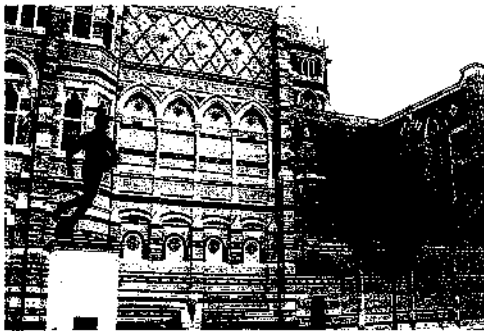
この小論では、*Good-bye Mr. Chips* を取り挙げ、その舞台となった The Leys School に関して、作者 James Hilton と Mr. Chips のモデルとなった教師 W. H. Balgarnie について、そしてこの作品自体について記述し、英国文化の一考察となしたいものとする。

I

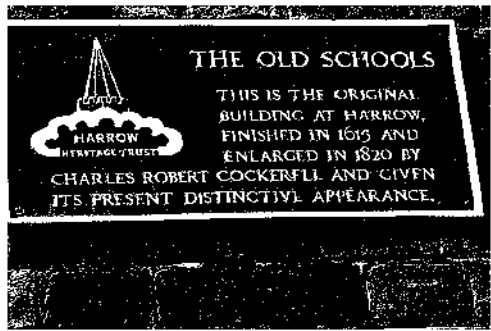
パブリック スクールをモデルとした物語としてまず思い浮かぶのは James Hilton (1900-1954) による *Good-bye, Mr. Chips* (1934) そして Thomas Hughes (1822-1896) による *Tom Brown's School Days* (1857) である。前者の舞台はケンブリッジ大学にほぼ隣接する距離にある The Leys School を舞台とし、後者は Rugby School を舞台とする物語である。Rugby はすでに他の論考中に取挙げた戦争詩人 Rupert Brooke (1887-1915) の母校であるが、何よりも念頭に浮かぶのはこの学校こそがラグビー競技の発祥の地であることである。校舎の側、通りに面して、この競技を生み出す元となったひとりの生徒のボールを抱いて走る姿の像が建てられている。彼の名は William Webb Ellis と言い、この少年がフットボール競技中に、興奮のあまり、ボールを抱きかかえてゴールに飛び込んだのである。Ellis 少年が学んだ学舎の名に因んでこの競技の名が生まれたことはあまりにもよく知られている。この新たな競技を生んだグラウンドは今も広々とした緑鮮やかな芝のグラウンドとして横たわり、その校舎側に白い柱のゴールが一際印象的である。『トム・ブラウンの学校生活』第一章に於いてこのラグビー校でのフットボール



Eton College 正門と教室



Rugby School 校舎前の William Webb Ellis 少年像とグラウンド



Harrow School 正門と銘版



King William's College の校舎と遠景

のことが描き出されている。前者の The Leys School はケンブリッジ市街、ケンブリッジ大学の中心に位置するキングズ コレッジ前のキングズパレードを南の方向に進んで、右手に St. キャサリンズ コレッジ、左手にコーパスクリスティー コレッジを過ぎ、次の小さい四辻で左手にペンブルック コレッジ、その右手にケンブリッジ最古のコレッジのピーターハウス前を進むと、すぐ右に大学美術館フィッウイリアム ミュージアムを通り過ぎて行かねばならない。この美術館からさらに約300m位前方にある四辻の交差点右側前方の一角が作品の舞台、The Leys School である。交差点を南へ走る通りは Trumpington Street と称する通りで、この通りはかつて詩人チョーサー (Geoffrey Chaucer 1340-1400) が『カンタベリー物語』 *The Canterbury Tales* (1387-1400) に於いて既にその名を記している由緒ある古い並木の通りである。この通りの先は A10, 高速 M1 を経て首都ロンドンへと向う。この The Leys はケンブリッジ大学ペンブルック コレッジのフェロウで中世英語学者 Dr. Colin Wilcokson により、リーズ校の歴史についてのみならず、*Good-bye, Mr. Chips* の作者 James Hilton についての右に出る者のない泰斗、Dr. Geoff Houghton に紹介される機会を得た。ヒュートン博士はケンブリッジ大学最古のコレッジ、ピーターハウスの出身で1957年以来リーズで当初生物学と化学の教鞭を執られ、1966年から1980年までリーズの寄宿舎 North B の寮監 (Housemaster) を務められ、1993年この学校を退かれるまで、このリーズと共に歩んで来られた方である。そして何よりもリーズの学校史 *Well-regulated minds and improper moments* (2000) の著者である。このスクール史の標題は1889年から1924年の間リーズに職を奉じた E. E. Kettel による箴言から採られたものであるが、これはリーズ開校以来百年の長きにわたって、学校の規律を犯した生徒が、校則違反の罰則として犯した違反の軽重に応じて決められた回数だけ、この文章の清書を課せられることに決められていたものである。この一文にそこに込められた英国パブリック スクールの建学の精神性の一端を読み取る事が出来るように感じられる。曰く、

“Few things are more distressing to a well-regulated mind than to see a boy who ought to know better, disporting himself at improper moments”

「規律ある精神の持ち主にとって、分別あるべき少年が、しかるべき時を

わきまえず戯れ興じる姿を見守ることほど頭痛の種となるものはない」と。

この書の『はしがき』冒頭にはこの書を著すにあたっての著者自らの言葉が以下のように記されている。

“Several years before North B House reached its Centenary in 1983, I realized, as Housemaster, that stories about life in the House needed recording. I had also become interested in the life of James Hilton, which then led me to seek information about W. H. Balgarnie, the real “Mr. Chips””(2)

「North B House が1983年にその百年記念日に達する数年前、私は寮監として寮生活についての物語が記録される必要があるということを認識しました。私は又ジェイムズ・ヒルトンの生涯についても興味を抱いておりましたので、そのことによって真実の「チップス先生」である W.H. バルガーニーについての情報を求めることに導かれたのであります。」

Ⅱ

チップス先生のモデルとなったのはこのリーズ スクールに於て半生を捧げた教師 W.H. Balgarnie であった。Dr. Houghton による彼についての記述は以下のものとなっている。

「人生の多くをこの学校に捧げた教員のもう一人は W. H. バルガーニーであった。彼はウルウィッチ (Woolwich) の長老派教会牧師の息子であった。彼は最初ローアン スクール (Roan School) に入りそれからグラヴセンド スクール (Gravesend School) に学んだ。ここでロンドン大学入学許可試験に合格してその後原始メソヂスト派による設立校、ヨークのエルムフィールド スクール (Elmfield School) (現在廃校) で助教授 (生徒指導者) となり、ここに在職中に学外ロンドン大学学士号のために勉学して1889年に学士号を取得した。コーンウォールでホウエイ スクール (Fowey School) に於て短期間教えた後、彼は現在ロンドンのエルサム コレッジとなっている宣教師子弟のための学校に移った。そこに於て彼は自分の勉学を続け1893年にロンドン大学修士号を取得した。彼は雇用されていた全ての期間中にケンブリッジ大学に自力で学業を修めていく学費を支払うための費用を貯えた。彼



作品の舞台 The Leys School 正門と芝のグラウンド



The Leys School 本館横の教室



The Leys School 本館

の兄エリックも彼より3年前に同様のことを行っていたのである。ウィリアムは26歳でトリニティに入学した。このことは彼の同世代の大部分の者たちよりずっと年上ということであった。彼は古典学の優等卒業試験でFirstの成績を収め、グラスゴー



Dr. Geoff Houghton

大学の古典学科にギルバート・マレイ (Gilbert Murray) 教授の下に参画した。彼はウッドブリッジ スクール (Woodbridge School) で教えるために僅か短期間で古典学科を後にした。最終的に1900年彼の経歴はリーズ (The Leys) に於て始まった。但し彼は短期間リーズを離れる休暇を得たが、それはウッドブリッジに於て新しい校長が任命されるまでそこでの校長代理を務めるためであった。次の29年間彼はその人生をこのリーズに捧げることとなり、彼の生徒達の大多数の者たちに慕われ愛された。彼が教え影響を与えた

リーズ スクール卒業生たちは彼の死後彼らのためにバルガーニーがなしてくれたことへの感謝の気持ちを書き記している。ヒルトン (Hilton) の同級生たちはバルガーニーが彼の文章に対していかに励ましを与えてくれたかを覚えており、そして彼らすべての者たちがジェイムズが自分の作文を教室の者たちに読み上げるのを聞いた時に得た感激を覚えている。バルガーニーは引退後、トランピントン (Trumpington) 通りを横切ったばかりのブルックサイド (Brookside) に住み、新入生たちをティーでもてなした。丁度、ヒルトンの小説の主人公がそうしていたようにであった。バルガーニーの同僚の一人は後に、彼の愛する猫を膝の上に抱いて、ボアータバコを詰めたパイプで幸せそうにプカプカ吸いながら口をすぼめペンを手にして、*The Fortnightly* 誌の次号のために原稿を削ったり注釈を付けたり修正したりしている彼の姿が、夕焼け空にしばしば見かけられたと記している。

教員スタッフからは退いたけれどもバルガーニーは、彼の時間の多くを学校で過ごしていた。教員スタッフの一人は彼が学校に初めて来た時、バルガルニーが夕食には大抵の夜彼らの仲間に加わっていたことを覚えている。ジェシー・メラー (Jessie Mellor) が食事の主人役を務めるとバルガーニーは彼の隣に座った。食卓についている者たちはバルガルニーが色々な話を幾度も幾度も繰り返して話すのに耳を傾けねばならなかった。メラーは思いやって笑うのであったが他の者たちはそれ程敬意を払わなかった。

60歳で退職したすぐ後、校長のハリー・ビッセカー師 (the Revd Harry Bissek) が健康上の理由で一年間の休暇を認められて取っている間、校長として働くようにバルガーニーは呼び戻された。彼はそれ以前にバーバー師の退職後ビッセカーが着任する前、校長代理を務めていた。そこで彼はもう一度再び生じた状況に、ある種の皮肉を感じていたに違いなかった。一たん、ビッセカーが戻ってくると、バルガーニーは再びブルックサイドの宿に引きこもることが出来た。ここが彼の以前の生徒であったジェイムズ・ヒルトン (James Hilton) が訪ねた時、彼が住んでいた所であった。後にヒルトンは『チップス先生 さようなら』の中に次のような言葉を書いた。

「道路を横切って古い愉の木立の塁壁の向こうに、秋の蔭に覆われてあずき色となったブルックフィールドがあった」と。悲しいことに高い愉の木々は

オランダ榆病にかかって今は姿を消してしまい、鳶もレンガ部分の漆喰を傷めていたために引き抜かれてしまった。バルガーニーが学校の校庭を横切って目にしていたであろう眺めは今は近代的建物の並びの空に映じる輪郭によって占められている。彼がかつて寮監であったウエストハウスに取って替わった新しい寄宿舎の比較的な豪華さをよしとしたかどうかは疑わしい。アルミニウムの幾何学的な斜めの屋根、寮のコンピューターや調理器具、木ずり作り、炉はこのような学究的古典学者にとっては幻想の品々であったであろう。

『チップ先生 さようなら』は戯曲化され、そして、ロンドンの初演の夜、ヒルトンはカーテンコールのために舞台に呼出されたが、その時、彼はバルガーニーが座っていたボックス席にスポットライトを向けさせた。バルガーニーはケンブリッジに戻った時にとてもばつが悪かったと一人の同僚に語ったものの、同僚達の幾人かの印象では、彼がそれを喜んでいたと思えた。後年、彼はその芝居は小説の人物の半分しか演じていないものであったので、あまり評判にはならなかったと語っていた。1951年にバルガーニーが亡くなった時、ヒルトンはその時なおリーズ校の校長であった Dr. Humphrey に手紙を次のように書き送った。

「バルガーニーは私が思うに、私がこれまで得た限りでの私の物語の主たるモデルでありました。私の学校生活に於て彼は確かに私にとって決して忘れることの出来ない人物でした。パブリックスクールの生活についての他の多くの物語を読んでも、私自身は多くの物語の作者たちが明らかに味わったような、苦難の経験に苦しめられることなど全くなかったという事実には私は心打たれています。そしてこうした奇跡（もしもそうしたことが奇跡であったとしたならば）の多くはバルガーニーのお陰によるものでした。彼は私がごく普通の生徒ではなかったことを認めていたというばかりでなく、彼がこんなにひどい生徒などいるものではないという、より深い真実を見出していたからだと思うのです。」

バルガーニーは、主人公チップング氏とは異なって一度も結婚はしなかったけれども、彼が結婚したいと願っていたのは誰だったのだろうか。その女性は彼を断ったというものの、結局彼女は息子をリーズ校に送って、彼の寮に



チップス先生のモデル Balgarnie



ブルックサイド 6 番 Balgarnie 下宿

入れたということが報告されている。この少年は後にジャーナリストとなりカナダに移住した。この話はこの人物が既に亡くなり、結婚もしていなかったので確かめることは出来ないが。

バルガーニーは教員として1900-1930及び1940-1946をリーズ校で過した。⁽⁴⁾ バルガーニーが下宿したブルックサイド6番地の家は現在もリーズの校舎の正門前のトランピントン通りを横切った住宅群の一角の隅に当時のまま存在することを筆者は Dr. Houghton の案内で確認することが出来た。

III

バルガーニーを主人公とした名作『チップス先生 さようなら (Good-bye, Mr. Chips!)』の作者 James Hilton について Dr. Houghton の著作によると以下の通りである。

「ジェイムズ・ヒルトン (スクールハウス1915-1918) は恐らく全てのリーズ校出身の作家たちの中で最も良く知られている。彼の小説『チップス先生 さようなら』は多くの人々によって、献身的学校長についての、時代を問わぬ最高の描写であると思われている。ジェイムズは1900年に生れた。彼の父はロンドン北部の小学校校長であった。…

ジェイムズはロンドン北部の学校に行き、最初は土地の小学校そしてそれからグラマースクールに入った。1914年6月に彼は Haileybury College の奨学金を得た。しかしながら常に平和主義者であった彼の父が、この学校の学校案内から、そこがライフル射的場と将校養成隊の両方を所有するというところを見つけ、ジェイムズは入学者リストから撤回させられた。又この時第一次大戦の最初の年に当たり、ジェイムズはロシアの情勢に興味を覚えた。特にこの国を述べ伝える手紙を彼に書き送っていた彼の叔父の一人が、ロシアで粉引き場の支配人だったからである。ジェイムズはロシア語を学び始め、ロンドンにあるロシア銀行の職に応募し、そして彼はもう少しでその職を得るところであった。もしも彼がそのようになっていたならば、彼はロシアに送られ、ロシア革命の間ロシアにいたということになっていたかも知れない。とに角こうした出来事が彼の後の書き物に大いに影響を与えた。こうした出

来事はロシアから追放され、しばらくの間無一文となった彼の叔父にさらに影響を与えたのである。しかしながら彼の叔父は繁栄を取り戻し、そして1951年叔父はブラックプール（Blackpool）の市長となっている。

ヒルトンが15歳になった時、彼の父は再びジェイルズをパブリック スクールに送り出すことを考えた。しかし、ジェイムズの父はどの学校にするか決めることができなかったので、息子に自分自身で選ぶことを許した。ジェイムズ少年は一人でイングランドを旅し、ヨークからチエルテンハムへ又ブライトンからシェルボーンへ汽車の旅を行い、校長に面会した。彼に会うことを断った校長は僅かに2人か3人であった。ジェイムズは後に彼のこの時期の人生について述べて、彼は校長たちが、少年たちの両親に対する印象よりも、少年たちに対して得た印象の方により関心を示してくれればよいことだと考えたと記している。そして結局ついに彼はある週末をケンブリッジで過して、そして大学と街の雰囲気の両方に感銘を与えられ、リーズ スクールの校長ドクター バーバー（Dr. Barber）も彼を迎えてくれた。その迎え方に印象付けられたのであった。彼はこの学校にライフル射的場と将校養成隊があったにも拘らず、ここを自分の学校として選び出した。ジェイムズは彼の父親が物忘れしがちであり、又気にとめない性質であるという事実に望みを託して彼はこの学校に登録し、1915年の夏学期の半ばに入学した。

ジェイムズの *To you, Mr. Chips* の中における自叙伝的章の中で、彼は自らが模範的な生徒ではなかったことを思い起こしているが、彼はリーズ校で幸せであったので、このことはこの学校にある程度の寛容さがあったことを示している。戦時ではあったけれども、彼は殆ど強制的な将校養成隊に加わることを強えられることはなかった。当時典型的なある種の偽善があった。ヒルトンは日曜日の礼拝堂の説教がしばしば「敵を許そう」というテーマの下に行われていたが、月曜日には士官候補生たちがフットボール競技場の上に設けられた袋に銃剣での教練を行っているのを見守るという具合であった。ジェイムズにはこうした矛盾が彼の心にとりついて離れなかった。

ジェイムズは大戦の間、他の多数の生徒たちと同じように戦いの話によって大きな影響を受け、*The Fortnightly* 誌に掲載されることとなった彼の短編のいくつかが、塹壕の中及び家庭に於いても共に彼が戦いに気を取られてい

たことを映し出している。16歳の夏の休み中にはロンドン上空へのツェッペリン飛行船による空襲を目撃した。彼はその経験を短編に纏め、その出来事があった3週間も経たない中に学校の雑誌に掲載された。『銃剣』(The Bayonet) と題したもう一篇の物語には砲弾によってできた穴の中でイギリス兵とドイツ兵が一夜を明かす話が語られた。

ヒルトンの同級生たちの多くのものがジェイムズとクラスを共にした感動を語っているが、ヒルトンは彼の書いた物語を第6年級の他の生徒たちに読み聞かせるようにしばしば求められていたのである。同級生たちは彼が静かな生徒だったと伝えている。そして普通の生徒たちと彼を目立たせていた唯一の点は、寮の地下にある浴槽の一つに一匹の大きな魚を飼っていて、誰か風呂に入りたいものがあるといつもその魚をすくい出していたというものであった。時々彼はキングズ コレッジチャペルでの夕べの祈りに出かけたり、しばしば夏の半日休暇を利用してグランチェスター (Grantchester) のオーチャード (Orchard) ティールームへ、ティーを飲みにも自転車で出かけていた。ある時彼はイッピング フォーレスト (Epping Forest) にある彼の家まで自転車を出かけて彼の女友達と会って帰ってきても、寮監に気付かれずじまいであったこともあった。

彼の早い時期の書き物のいくつかは彼の亡くなったいここであったローランド (Rowland) とエリザベス・ヒル (Elizabeth Hill) の許に残されていた。これらのものの中で学校の練習帳に彼が書いていた短い小品があった。それはイッピング フォーレストでサイクリングしている間に会った一人の少年と少女の物語で、その後どのように2人が恋したかを語るものであった。又その収集物の中にはジェイムズが16歳になったときにつけ始めていた短い日記があった。ある箇所に「今日は手紙一通来なかった」そして次に、「今日も又手紙が来なかった」とある。それから彼はその日曜日の校長の説教が友情の終わりと思われたような気持ちを克服するのに、どんなに助けとなってくれたかを記している。彼は続けてどのようにして彼が女友達と出会ったかを書き記したかを述べている。これらの出来事は物語の中に記された出来事ときわめて似通ったものであるが、しばしば形を変えて移し描かれた。例えば物語の中で彼のタイヤがパンクしてしまったことはその女性に実際に起

こったことであった。

ヒルトンの学校生活は1918年7月に終わった。彼や彼の友人たちの学校生活は戦争と実際に兵役を務めることへの思いによって影を落とされていた。彼らはもしも戦争が長引くこととなれば、彼らが受けてきた教育の高い理想といかに矛盾するものがあるだろうとも、戦争に参加しなければならなくなるだろうということを知っていた。差し迫った悲劇によっても彼らは殆ど悩まされることはなかった。それが学校生活の喜びを際立たせ、学校生活のささいな困難に対しての緩衝役を果たしてくれた。ヒルトンの場合にあっては、差し迫った悲劇が彼の思い出の焦点となった。彼は次のように書いている。

「学校長の注意深い生徒評価ももっと大きいもっと荒っぽい点数付けによってかき消されてしまった。学校を放校となった一人の少年が勲章をつけて英雄として戻ってきた。avoir 動詞や être 動詞を活用変化させることが出来ないことは、1913年に於いては将来の前途を危うくすると思われていた者達が、フランス語を征服する以上にフランスの敵を征服することとなったのだ。1月に喫煙したことによって禁足を命ぜられる校則を犯した者達が12月には空から爆弾を投じていた。それは狂気の世界だった。そして僕たちも口に出しては言わないものの、そうだと分かっていた。ゆっくりと一步一步と戦争の潮は僕たちの隠遁の場の門口にひたひたと押し寄せていた。」

ヒルトンはクライスト コレッジに奨学金を得た。戦争のその時期に男子学生たちは勉学を始める前に6週間から8週間、集中訓練を行う大学の将校養成隊に加わるという条件付きでケンブリッジに起居することができた。結果的には戦争が11月に終結し、彼は勉学を途中でさえ切られることもなく続けることができた。彼は非常に良い成績を収めたので、コレッジは4年目の研究を行えるように奨学金を与えた。彼は最初の3年間コレッジに住んだが、4年目に彼はクライストピースを離れ、ピクトリア ストリートのベランダ付の部屋の下宿屋に移った。その家は今日も見ることの出来るものである。リーズ スクールに居た間に小説を書き始めていたが、それをコレッジで書き終えた。その『キャサリンという名の女』(Catherine Herself) という小説は女性ピアニストと彼女のピアノ教師が2人の間でスヴェンガリの形の演奏会をギルドホールで開くというものであるが、ケンブリッジの街の描写、そ

してライオンヤードのショッピング センターと駐車場を作るために壊された通りの描写は、当時を偲ばせてくれるものであった。この小説は自叙伝的なものだと言われている。エゴイストのキャサリンはヒルトンの他の一面の自己描写である。彼はいつもコンサート ピアニストになる野心を抱いていたが、ピアノ教師の性格はジェイムズの父親を基にしたものであった。

ケンブリッジを出るとすぐに彼は主としてマンチェスター ガーディアン誌に記事を書く自由契約のジャーナリストとしての経歴を踏み出した。この新聞への彼の最初の仕事は、彼がリーズ スクールの雑誌のために書いていた最後の物語を僅か6語を変えて移し書きすることであった。これはクライスト コレッジ マガジンにも掲載されていたものであった。それはドイツと戦う戦争に狩り出された一人の読み書きのできないロシア農民の物語であった。ロシア革命が起こった時、彼は他の多くの者たち同様に故郷の家に戻るために脱走した。しかしながら彼は帰る道が分からなくなり、そしてその名もない村の名も思い出すことが出来なかった。物語は彼が汽車にひかれて死ぬところで、そして彼が故郷の家に辿り着いたと思う束の間の幸福を味わうところで終わっている。

このテーマは後に彼が1933年に書いた『鎧のない騎士』(*Knight Without Armour*) という小説の一章となって広がった。この作品は後にマルレーヌ・ディトリヒ (Marlene Dietrich) とロナルド・コールマン (Ronald Coleman) 主演による映画となった。この作品のテーマは、又彼のほかの作品中の一作『乱獲』(*Random Harvest*) の中に取り入れられた。彼がロシアに居る叔父から受け取った手紙類が、彼に一度も訪れたことのない国についての眼の当たりに見るような生き生きとした姿を与えてくれていたのである。

ヒルトンの家族の者達は彼の経歴の初期の頃、彼のことを大いに気遣った。彼は経済的には決して安定していなかった。マンチェスター ガーディアン誌への定期的寄稿者であるばかりでなく、ディリー テレグラフ誌に小説批評を行った。その間彼はほぼ2年ごとに新しい小説を出版した。彼はペンネームを使ってホキントンと呼ばれる学校を舞台とした『スクール殺人事件』(*Murder at School*) という探偵小説を書いた。これはきわめて彼の居た頃のリーズ校に似た響きのもので、登場人物の探偵はヒルトン彼自身に基づく

ものであった。

ついに1931年 *And Now Good-Bye* によって成功が訪れた。1933年に *Lost Horizon* 『失われた地平線』が続いたがそれは時が静かに佇んでいるチベットの遠く離れた片隅の物語であった。1935年までにこの小説は11万部を売り、当時としては相当な部数の売れ行きであった。1937年にはこの小説はロバート・コールマン主演によって映画化されて非常な成功を収め、1970年代初めに先の映画ほどの成功ではなかったが、ミュージカル化された。この小説で1933年、ヒルトンはホーソンデン (Hawthornden) 賞を受賞した。この賞の結果として *The British Weekly* 誌からクリスマス向けの短編執筆の委託を直に受けた。ジェイムズは考えましよう返事をし、イッピングの森へ自転車を走らせ、構想を携えて戻ってくるとその4日後には *Good-Bye Mr. Chips* を書き上げてしまった。編集者たちは大いに喜びはしたものの、その結果には戸惑わざるを得なかった。編集者たちが委託した3000語の短編の代わりに17500語になってしまっていたからであった。この問題の解決をするために、差込付録として出版することにした。1933年12月7日に出版され、ビップ・ペアーズ (Bip Pares) による挿絵入りとなった。

この本はアメリカの雑誌 *Atlantic Monthly* 誌に売られることとなり、同誌は既に出版されたものはいかなるものであれ使用しないという通常の規則に反してこの本を出版することとした。それは非常に成功を収めたのでアメリカでハードカバー本として出版され、次いでイギリスで1934年10月初めて同じ体裁で出されることとなった。当時一人の米国婦人がアメリカで会った一人の素敵な学校の校長に一冊を送った。彼女は校長からの礼状の中にこの校長がこの小説の舞台を提供したリーズ校の校長職に任命されたばかりだということを読んで、面白い興味深さを覚えた。彼女がこの本を買ったとき、自らが校長ジェラルド・ハンフリー博士 (Dr. Gerald Humphrey) の妻となり、リーズ校に住むことになるなどとは殆ど思いもよらないことであった。

ホダーとスタウトン (Hodder and Stoughton) によって出版された初版の表紙には学校のキングズビルディング (King's Building) 門がはっきりと写し出されている。しばらくの間、チップス先生のモデルが誰であるかの議論があった。ヒルトンは彼の登場人物ミスター・チップスをリーズ校校長で

あり、退職してブルックサイド (Brookside) 6 番地に住まう W.H. バルガーニー (Balgarnie) に基づかせていたのである。ここがヒルトンが訪れたときのバルガーニーが住んでいた所であった。ヒルトンは多くの以前の生徒たちと同様、ケンブリッジを訪れて彼を訪ねていた。

Lost Horizon と *Good-Bye Mr. Chips* 両作の成功によってヒルトンは脚本家としてハリウッドに招かれた。彼はそこで当時最高級のシナリオ作家となった。ジェイムズは *Mrs. Miniver* の脚本作家としてオスカー賞を獲得し、Greer Garson が題名役の演技でオスカー主演女優賞を獲得した。ジェイムズ自身の本も又映画化されたがそれらは Marlene Dietrich 主演の *Knight without Armour*, *The Story of Dr. Wassell*, *We are not Alone*, *Random Harvest*, *Rage in Heaven* を含むものであった。*Mr. Chips* ではオスカーを Robert Donat が獲得したが、意外な事にヒルトンは自ら自身のこの小説の脚本を書くことはなかった。

彼は書き続けていった。1951年の *Morning Journey* はハリウッドを舞台として、映画製作監督、女優及び脚本家たちの間における緊張関係を描き、1948年に書かれた *Nothing So Strange* はアメリカとカリフォルニアのハリウッドを設定としたものであった。その筋は最後には広島への原爆投下にいたる科学者間の葛藤を扱ったものであった。

1950年頃には彼はハリウッドにおけるライフ スタイルのもたらす圧迫感に幻滅を感じるようになっていた。彼は家族宛に自分が自分のペースで小説を書くことに戻りたいという手紙を書いている。彼は自らの大いなる成功にも拘らず、控えめで交際をあまり求めない人間であった。1951年にケンブリッジを訪れて母校を訪ねた。彼の家族のものが学校の食堂の外での彼の写真を所持しているが、彼はクリケットを観戦しても自分が何者かを誰にも告げようとはしなかった。



「チップス先生さようなら」の作者 James Hilton

ヒルトンは1954年ガンにより死去した。彼は生涯最後の6週間で病院で過ごし、彼の最初の妻 Alice がその最後の3週間ベッドのそばに付き添った。タイムズ紙は彼の生涯最後の数日間、毎日彼の容態書を掲載した。⁽⁵⁾

IV

『チップス先生 さようなら』はこの名作の舞台となっているブルックフィールドスクールに於いて、教師人生の殆どを、いやむしろ生涯の大半を過したチップスという教師の回想物語として記されている。

物語は既に十年も前にブルックフィールド スクールを退き、この学校の校舎には道路一つを隔てただけで隣接するウィケット夫人と称するこの婦人所有の家に住んで晩年を迎えたチップスが、うとうとしてものうげな秋の日を過している所から始る。ブルックフィールドでは秋の学期も進み日も短くなっている日のことである。“the hours seem to pass like lazy cattle moving across a landscape”「まるで田園の風景をのろのろと進み行く牛の群れのように時は過ぎ行くよう」という冒頭の出だしは、トマス・グレイの『墓畔の悲歌』の冒頭の一節にある“the lowing herd wind slowly o’er the lea”「牛の群れは低く鳴きつれて、のろのろと野を進み行く」を想起させる。

1848年生れのチップスはメルベリで1年勤めた後、1870年普仏戦争勃発の年のウェザビー校長時代、ブルックフィールドに履歴書を提出したのであったが、赴任のために校長と面会した日は、運動場からクリケットの球が快く響く7月のあるさわやかに晴れた日のことであった。ブルックフィールドの様子は次のように記されている。

“Across the road behind a rampart of ancient elms lay Brookfield, russet under its autumn mantle of creeper. A group of eighteenth-century buildings centred upon a quadrangle, and there were acres of playing-fields beyond, then came the small dependent village and the open fen country. Brookfield, as Wetherby had said, was an old foundation; established in the reign of Elizabeth, as a grammar school, it might, with better luck, have become as famous as Harrow.”

「古い榆の木立の塁壁の向こうにある道路を横切ってブルックフィールド

は秋のつたに覆われて赤褐色の色合いに横たわっていた。一群の18世紀の建物が中庭を真中に囲んでいた。そして何エーカーもの運動場が広がっていた。それから小さな学校付属の村があり、広々とした沼沢地があった。ウェザービーが語ったところによれば、エリザベス女王治世の御代に文法学校として設立された古い学校であった。もっとよい幸運に恵まれていたならばこの学校はハロウ校と同様な名声を博し得たかもしれないというものであった。」

この学校は長い歳月の間に幾多の盛衰を経ていたが、ジョージI世時代に本館が再建され大きな増築がなされた。その後ナポレオン戦争後ヴィクトリア朝半ばに至るまで、生徒数に於いても評判も落ち目となっていた。1840年にウェザービー校長が着任して多少回復したものの、それに続く歴史によっても一流校とはなり得ていなかった。「それにも拘らず、二流の立派な学校であった。」いくつかの名のある家族がこの学校を支えていて、時代の歴史を作る人物たち一判事、国会議員、植民地行政官、二・三の貴族や司教たちを立派な例として生み出していた。とは言え、たいていは商人、製造業者や法律家や医師といった専門職の者、かなりちらほら地方の大地主や牧師となった者たちがその卒業生であった。この学校のことが話題となる時には、紳士気取りの人々がこの学校のことを耳にしたことはあるように思うと言いそうな位の学校であった。

このような学校にチップスは職を得たのであるが、しかしその程度の学校でもなかったならば恐らくチップスを採用することはなかったであろうと作者はチップスについて言及する。

“For Chips, in any social or academic sense, was just as respectable, but no more brilliant, than Brookfield itself.”

「というのはチップスはいかなる社会的、或いは学問的意味に於いてブルックフィールド校と丁度同じ位立派ではあるが、ブルックフィールド同様異彩を放つような人物ではなかったからである。」と。

このようなチップスではあったが、この学校へ着任して10年を経た1880年頃には彼はこの学校より別の学校へ栄転する望みはないことの悟りと同時に、この学校での地位に心からの喜びすら抱きつつ、40歳を迎え、50歳には最古参の教師となって、60歳になると新任の若い校長の下で彼こそブルック

フィールド学校そのものとなっていた。教室では記憶法や語呂合わせやジョークによって生徒たちを笑わせ、そうしたユーモアによって生徒たちに何かしら感銘を与える教師であった。ブルックフィールドの歴史と伝統に影響を与える存在として1913年、65歳となったとき、彼は小切手と机と時計とを贈られて退職し、道路一つ隔てたウィッカー夫人邸に住み込みの住人となったのである。

チップスが移り住んだ家とそこでの生活は以下のように記されている。

"It was a small but very comfortable and sunny room that Mrs. Wickett let to him. The house itself was ugly and pretentious; but that didn't matter; it was convenient, that was the main thing. For he liked, if the weather were mild enough, to stroll across to the playing-fields in an afternoon and watch the games. He liked to smile and exchange a few words with the boys when they touched their caps to him. He made a special point of getting to know all the new boys and having them to tea with him during their first term. He always ordered a walnut-cake with pink icing from Reddaway's, in the village, and during the winter term there were crumpets, too—a little pile of them in front of the fire, soaked in butter so that the bottom one lay in a little shallow pool. His guests found it fun to watch him make a tea—mixing careful spoonfuls from different caddies."

「ウィケット夫人が彼に貸し与えたのは小さいがとても居心地のよい日当たりの良い部屋であった。家そのものは見てくれのよくない仰々しい感じのものであった。しかし、そのようなことは問題ではなかった。便利な所であってそのことが肝心であった。というのはもしも天気が十分に穏やかな日であったならば、彼は午後を運動場へ道を横切ってぶらぶらと出かけて試合の見物をするのが楽しみだったからである。彼は少年たちが彼に帽子に手をかけて挨拶すると笑いかけて、二言三言彼らと言葉を交わすことが好きだった。とりわけ彼は新入生たち全員を知ろうと心掛け、最初の学期中に彼らをお茶に招こうとした。彼はいつでも村のレダウェイの店から、ピンクの砂糖のふりかけの衣をまぶしたくるみ入り菓子を注文した。そして冬の学期の間にはマフィンもまたご馳走した。——暖炉の前に小さく山にした菓子がバターの中に浸されてしまい、一番下にあるものが小さな浅い溶けたバターの中につ

かっていた。招かれた者たちは彼がお茶を入れるのを——色々な茶筒から注意深くスプーン一杯にした茶を混ぜて入れるのを見て楽しんでいた。」

チップスはこの新入生たちをこのようにしてもてなしながら、彼らの住んでいる所、身内の者の中にブルックフィールド出の者たちがいるのかどうかを尋ねながら、彼らの皿が決して空にならないように見守りながら一時間の閑談の時を過ごすと、5時きっかりに時計の方をちらりと見やってこう言い出すのがきまりであった。

“Well—umph—it’s been very delightful—umph—meeting you like this—I’m sorry—umph—you can’t stay…”

「ところで——うむ——とても楽しかったよ——うむ——君たちとこんなにして会えて——済まんが——うむ——引き上げてもらわにゃいかん…」

そして彼は玄関で笑いながら握手をして彼らを送り出す。このようにチップスの晩年の日々は過ごされていく。

チップスには旧姓キャサリン・ブリッジズという当時25歳の美しい女性との出会いがあり、後日彼女とロンドンで結婚式を挙げる事ができた。チップスが48歳という年齢となっていた1896年の夏、湖水地方のグレイト・ゲイブル山に登った時の思いがけない出会いがそのきっかけであった。キャサリンは当時としては珍しく、女性であるにも拘らず自転車を乗り回し、イプセンを崇拜し、女性の大学入学が認められるべきことを信じ、女性の選挙権獲得を考える非常に進歩的な政治的意見を保持していた。そのような女性からチップスは愛情を持たれることとなったのであった。その理由はチップスの人柄やその態度にあったが彼女によって好意を持たれたチップス像は以下のように描かれている。

“She liked him, initially, because he was so hard to get to know, because he had gentle and quiet manners, because his opinions dated from those utterly impossible seventies and eighties and even earlier—yet were, for all that, so thoroughly honest; and because—because his eyes were brown and he looked charming when he smiled. “Of course, I shall call you Chips, too,” she said, when she learned that that was his nickname at school.” ”

「彼女がそもそも最初に彼を好きになったのは、彼の人柄を知るのが一筋縄

ではいけないものであったからであり、彼が穏やかで静かな態度の持主であったからであり、彼の抱く意見はまったく1870年代及び80年代の、そしてそれよりももっと以前の、今ではまったく考えられもしないようなものの考え方の持主であったからであり、そうしたことがあるにも拘らずまったく正直そのものであり、彼の目の色が茶色であって、笑った時の表情が魅力的であったからである。「もちろん私も、あなたのことチップスって呼びますわ」とそれが学校での彼のあだ名だと分ると彼女はそう言った。」

そしてキャサリンにはチップスに教師という天職を得ていることを何よりも高く評価して語りかける言葉があった。この彼女の言葉は、作者ヒルトンがチップスという主人公の生き方を通して、教育という職業がいかに尊いものであるかということを、彼女の言葉によって読者に伝えようとしたメッセージと言えるものである。

“Oh, Chips, I’m so glad you are what you are. I was afraid you were a solicitor or a stockbroker or dentist or a man with a big cotton business in Manchester. When I first met you, I mean. Schoolmastering’s so different, don’t you think? To be influencing those who are going to grow up and matter to the world...”

「ねえチップス、私あなたがいまのあなたであるのが嬉しいわ。私あなたが弁護士か株式仲買人とか歯医者さんか、それともマンチェスターで大きな綿織物商売をしている人ではないかと思っていたの。あなたに初めて会った時にはね…。先生の仕事ってそんなものとは大違いと思わない。大きくなって世の中にとって大事な人たちとなる人たちに影響を与えられるってことはね…。」

このようにキャサリンは教師として将来に望みある若い生徒たちを教え導くという聖職にあるチップスを励ましつつ、彼女はチップスのブルックフィールドに於ける教育上の諸問題に貴重な数多くの助言と示唆を与えて、チップスを支えていくのである。彼女は言わばチップスにとっての指針的存在であった。

彼女は身分、階級を越えて人は平等であるべきとするリベラルな思想性を所持していたが、そのような姿勢を如実に示し出した一つのエピソードが記される。このエピソードは英国社会にかたくなに存在する所謂、上流階級と下

層階級との差別的意識を生み出している“class conscious”な英国人の社会的因習への批判が読み取れる。そのエピソードに彼女の社会改革派的理想主義精神が見事に示し出されている。ブルックフィールドがロンドンのイーストエンドに経営する慈善学校があったが、この学校へは生徒とその両親の寄付金が出されているものであった。イーストエンドはロンドン東部の貧民区域であり、生徒にしてもその両親も個人的接触をする者は殆どない状況であった。そのような慈善学校のサッカーチームをブルックフィールドに招いてサッカーの試合をすることをキャサリンは提案する。このようなことはブルックフィールドの伝統からすれば、あたかも革命を起こすかのような提案であった。

“To introduce a group of slum boys to the serene pleasaunces of better-class youngsters seemed at first a wanton stirring of all kinds of things that had better be left untouched. The whole staff was against it, ...Everyone was certain that the East End lads would be hooligans, or else that they would be made to feel uncomfortable; anyhow, there would be “incidents,” and everyone would be confused and upset.”

「貧民街の少年グループを上流階級の生徒たちの穏やかな学園に招くなどということは最初はさわらぬ神にたたりなしといったような、ありとあらゆる種類のものを理不尽にも攪乱するようにも思われた。全職員が反対した…誰もがイーストエンドの若者たちは不良少年たちに違いない。そうでなくても不愉快な目に合わされるのがおちだ。とにも角にも「やっかいな事」が起って誰もが混乱しあわてふためかさせられるだろう。」

こうして富裕なイギリス上流社会の階層に属する人々の下層の貧困者に対する偏見や先入主観が、ブルックフィールドに関わる全ての人々の反応の中に浮き彫りにされ、そうした偏見や先入主観がいかに歪曲した不当なものであったかが、その後の結末の結果によって証し立てられている。

このようなブルックフィールドの歴史や伝統的慣例に背いた前代未聞の暴挙とも見える提案を、キャサリンが主張したのは1890年代のことであったことを考慮すれば、彼女がいかに近代的理想主義に燃えていた稀代の女性であったかが察せられる。作者ヒルトンの平等博愛主義的作家姿勢が窺われるものと思われる。キャサリンは次のように自らの信念を力説して訴え説得す

る。

“Chips,” she said, “they’re wrong, you know, and I’m right. I’m looking ahead to the future, they and you are looking back to the past. England isn’t always going to be divided into officers and “other ranks.” And those Poplar boys are just as important—to England—as Brookfield is.”

「チップス」と彼女は言った。「皆間違っているわ。そして私の方が正しいわ。私はね未来を見つめているの。みんなはそしてあなたは過去を振り返って見ているんだわ。イギリスはいつも将校たちと「他の階級の者たち」とに分けられていくとは限らないわ。そしてあの下層地区の少年たちもイギリスにとってブルックフィールドと同じように大切なのよ。』

ブルックフィールドは歴史の古い学校であるとは言え、作品冒頭に於いて示される通り “it might, with better luck, have become as famous as Harrow.” 「運よく行けばハロウ校と同じ位有名になっていたかも知れない。」とはいうものの、それまでの歴史の中で隆盛の時代も皆無ではなかったにしても、“it’s subsequent history never raised it to front-rank status. It was, ...a good school of the second rank.” 「その後の歴史の中で一流校に上ることは決してなかった。二流での立派な学校であった。」と記されるように、英国の最も名門パブリック スクールとして名高い、ウインストン・チャーチルや詩人バイロンの出身校のハロウや、イートン、ラグビー、ウインチェスターといった一流の学校ではなかった。上流階級の子弟が学んでいたにしても、イギリス最高のパブリック スクールではなかった学校の場合でもこのような下級階層蔑視であったのだから、上記のような一流の学校に於ける場合であったとしたらどのようなものであったかが容易に察せられる。

ところでこのサッカーの試合の計画にはチップス自身も熱心な推進者となり、学校当局もこの “the dangerous experiment” 「危険な試み」 について同意し、サッカーの招待試合は実行された。結果は、ブルックフィールドの第2チームの7対5の勝利で、イーストエンドのチームは惜しくも敗れた。試合が終ると学校のダイニング ホールでのお茶と肉料理とのハイティーが催され、慈善学校のチーム メンバーは校長に紹介され、学校内を見物させてもらい、駅までチップスによって見送られた。作者は以下のように記す。

“Everything had passed without the slightest hitch of any kind, and it was clear that the visitors were taking away with them as fine an impression as they had left behind. They took back with them also the memory of a charming woman who had met them and talked to them; ...”

「万事すべていかなる種類の支障もなく終了した。そして遠征チームはブルックフィールドのいい印象を持ち帰ったがそれと同じく、彼らもいい印象を後に残したことは明らかであったのである。彼らは又彼らに会って話しかけてくれた魅力ある夫人についての思い出も持ち帰った」

結局案ずるよりは生むが易しという形になり、イーストエンドの貧しく下層階級の生徒たちも、立派なスポーツマンシップを発揮することのできる精神性を備えた優れたイギリスの若者たちであることが証明された。そして又彼らは一人一人が自分たちのことを思い、励まし助力してくれた一人の夫人への感謝の気持も忘れることのない、人間性豊かな若者たちであったのである。そして彼らも又祖国のために、上流階級の若者たちと同じく役立とうとする者たちであった。事実、後年彼らも又第一次大戦という祖国の命運をかけた戦いにおいて、祖国のために命を捧げた若者たちであった。この大戦下、ブルックフィールド近くの兵営に駐屯した一人の兵隊がチップスを訪れ、別れ際にチップス夫人の消息を尋ね、夫人が元気であるのかを尋ねるのであるが、その若者はパッシェンデールというベルギー、フランドル地方の村での戦闘に於いて戦死する。こうした悲劇がそのことをよく物語っている。ここには身分の上の者も下の者も、富める者も貧しき者も共に等しく祖国のために殉じて役立つ人々であるという作者の深い共感がこのようなエピソードに込められている。

キャシイという一女性は単にチップスの妻としてのみならず、ブルックフィールドの良き精神の担い手ともなり、貴重な得難い教訓を遺していくのである。このことを作者は次のように語っている。

“Kathie broadened his views and opinions, also, giving him an outlook far beyond the roofs and turrets of Brookfield, so that he saw his country as something deep and gracious to which Brookfield was but one of many feeding streams.”

「キャシイは彼（チップス）の見方や見解を広げ、又ブルックフィールドの

屋根や尖塔の遙か遠くまで届く視野を与えてくれた。そのお陰でチップスに、祖国イギリスが何か深遠で慈愛に満ちた国であり、ブルックフィールドもその多くの養い育てる水の流れの一つにすぎないことを分らせてくれた。」

このように情愛深く知性に優れた女性であったキャサリンであったが、悲しいことに彼女はこの記念すべき交換試合から、僅か一年も経たないうちに、生まれたばかりの赤ん坊と共に亡くなってしまう。1898年4月1日のことであった。愛する妻子を失った悲しみはあまりに大きく、チップスは悲嘆のあまりに茫然自失の有様となり、生徒たちから五十歳にして既に老人とも見なされるようにさえなってしまう。ただ幸いなことに彼には単に老いさらばえた感がなかった。さすがに彼の頭髮はこの数年のうちに胡麻塩になってはいたものの、彼の年齢の半分しかない若者相手にクリケットをして50点も叩き出したりする元気と仕事への興味と熱意を失うことはなかったのである。気持は青年だとチップス自ら語ることができた。この頃のチップスの風貌について作者の語るところによれば、妻の死から2年程経った新しい世紀の始まる頃には、彼の増々つのる風変わりな癖としばしば繰り返される冗談とが渾然一体となり一つの調和を見せている円熟の域に辿りついていた。

チップスのユーモア、それは彼を彼たらしめている最大の特長の一つであった。彼の周囲にはいつも哄笑の渦がわき起こった。彼は洒落の名人と評され誰もがそれを聞きたがった。彼が会合の席で挨拶に立つ時、部屋でテーブルを挟んでの会話の折には彼と同席の者たちは心から彼の口から冗談が飛び出して来るのを待ち構え、笑おうという一心で耳を傾けるものだから、いとも容易に満足させられた。肝心要の点まで来ないうちから笑い出してしまうという具合であった。

チップスに当代の世界の状況などに関することなど諸種の質問が浴びせられるのであるが、それは彼があたかも預言者と百科辞典を兼ね備えているかのようにであったからであるが、それらの答えに彼が洒落を皿に盛りつけたかのように出してくれることを誰もが楽しんでいたのであった。

チップスは何よりも祖国イギリスを愛し、信じ、そしてそのイギリスの伝統と教育の一端を担うブルックフィールドに対しても同様の気持を抱いていた。

“...always, whatever happened and however the avenues of politics twisted and curved, he had faith in England, in English flesh and blood, and in Brookfield as a place whose ultimate worth depended on whether she fitted herself into the English scene with dignity and without disproportion.”

「いついかなる時でもいかなることが起きようと、政治の進む道がいかにねじれ曲ろうとも彼はイギリスを信じていた。イギリスの肉と血を信じそしてブルックフィールドに対しても、その窮極の価値が威厳を以て釣合いを失わずにイギリスという舞台に自らを合致させられるかどうかにかかっている場所として信じていた。」

1908年チップスが60歳になった年のこと、校長ロールストンにチップスがラテン語やギリシア語の授業法をめぐって批判を受け、又教師用ガウンのだらしなさを指摘され、辞職を要求されるということがあった。しかしこの時元々ロールストン校長の教師たちへの奴隸的駆使への反発もあったこともあり、チップスの旧式な教育法を認めている若い教師たちの多くもチップスの周囲に集り、チップスが学校を追われるものならば暴動が起るだろうという噂もたつ程であった。理事のジョン卿もチップスに理事会としてはチップスがいないブルックフィールドは昔の面影も失われるも同然のこと、百歳までも留まって欲しいとチップスを励ます。チップスなくしてブルックフィールドは存在しないも等しい程にチップスこそはブルックフィールドの伝統であり、その精神の支柱となっていた。1913年チップスが65歳を迎えた夏、気管支炎を患い冬の学期をほとんど休んだこともあり、その7月、ブルックフィールドでの42年間の幕を引くこととなったが、第一次大戦の戦下若い教師たちが次々と入隊していくこともあったとは言え、ロールストンの後を継いだケンブリッジ出身のチャタリス新校長によりブルックフィールドへの復職を乞われたことは、その紛れもない証明であった。チャタリスの発病に伴いチップスは校長事務取扱いとなることとなったが、戦時下のチップスの役目の一つとして日曜毎に礼拝堂で戦死者名簿を涙声で読みあげる時の彼の悲痛な姿があった。1918年11月、理事会に辞表を提出した。それから15年後彼は豊かな安らぎの中でその当時のことを追想する日々を送ることとなる。そのような日々夏の季節がめぐってくると、ひっきりなしに生徒たちが訪れ、週末に

は昔の教え子の誰かがブルックフィールドに、そして彼の家を訪れてくれる日々を過した。1929年後は彼はブルックフィールドを離れることなく、天気さえ良ければ学校まで出かけ、自室に尋ねる客人を相変らず厚遇する日々を重ねた。1930年遺言状を作成し、貧民施設とウィケット夫人に残す遺産の他は奨学金制度の基金に充てることを条件に全額を学校に寄附した。

1933年の11月の午後、ウィケット夫人の家の応接間にいたチップスは、体の不調を感じていたが、礼拝式で風邪を引いたものらしかった。彼は夢見るように自分の生涯を回想する思いに耽りながら、1860年代のケンブリッジのこと、グレイト・ゲイブル山でのこと、ブルックフィールドでの年々のことなどをまるで長い絵巻物を見るように思い起こしていた。そこにリンフォードという生徒が訪ねて来て、この小柄なまだブルックフィールドに来たばかりの生徒に、チップスは63年も前になる彼がブルックフィールドに来た時のこと等を語る。このリンフォード少年は帰り際に “Good-bye, Mr. Chips...” という別れの挨拶をする。この「チップス先生 さようなら」という言葉が、それから炉辺に戻って坐ったチップスの心に何故か気に掛かり、いつまでも反響してこだまする中に彼はうとうとした眠りに落ちていく。気が付くと寝台に寝かされ、チップスの枕辺に医者メリヴィル、新任校長のカートライトその他の人々がいて、チップスの亡くなった妻のことなどを話していて、チップスに子供もなかったことを気の毒なことであったなどという話がなされている。それが聞えたチップスはつぶやいて言う。

“I thought I heard you—one of you—saying it was a pity—umph—a pity I never had—any children...eh? ...But I have, you know...I have....”

「僕は君たちが—君たちの一人が、可哀想だったと言っているのが聞こえたようだがね—僕に、子供が一人もいなかったことが気の毒だったとね…でも僕にはいたんだよ…いたんだよ…」

そして彼は弱々しいクスクス笑いをしながら、声震わせながら楽しそうに続けるのであった。

“Yes—umph—I have,” ... “Thousands of ’em...thousands of ’em... and all boys....”

「そう、うーん、僕にはいたんだ」…「何千人もの子供たちが…しかもみんな男の子たちがね」

するとそれから彼の耳に最後のハーモニーが、いままで聞いたこともない荘厳さでそして甘美に又心地よく響き、彼はやがて眠りに落ちていく。

翌朝、朝食の鐘の音が響いた時、訃報が告げられ、「ブルックフィールドは彼の優しさを決して忘れることはないであろう。」とカートライト校長が締めくくった。

V

The Leys はケンブリッジの実業家で初代ケンブリッジ市長となった Thomas Hovell が The Leys の校長宿舎となる家を1815年に建てたことに始る。その後種々経過を経て1873年7月2日メソヂスト高等教育委員会に1つの報告書が提示され、それには “it is desirable to establish a good Public School upon the Leys Estate, Cambridge”⁽⁶⁾ 「ケンブリッジのリーズ地所に優れたパブリック スクールを設立することが望ましい」という答申が出された。そしてその答申には学校がメソヂスト経営の下に置かれるべきながら、他教会に属する男児たちにも開かれるべきとされ、この敷地に新しい建物を建てるための資金調達についていかなるべきかが記された。そして寄贈者たちはこの学校で教育を受けることの出来る生徒を指名する権利を持つというものであった。設立委員会は英国全土の他のパブリック スクールの校長たちに経営原則、授業料及びカリキュラムについての質問状を送り、委員数名が Marlborough, Haileybury College, Charterhouse を訪れ又他に Rossall, Cheltenham, Clifton そして Bradford からの情報を得た。その中で新しい学校の構成に関して最大の影響力を与えたのは Marlborough であった。当時イートンに次いで二番目にオックスフォード及びケンブリッジ両大学での奨学金受領者の数を誇っていたからであった。初代校長には Dr Moulton が校長職を依頼され、彼による学校の三原則が打出された。“Everything was to be of the best quality” 「万事最高の質が保たれること」 “Religion should be the underlying principle of all elements of school life” 「宗教が全ての学校生活の要素の基盤の原則であること」 “Although Methodist, it must be free from a narrowly sectarian

character”⁽⁶⁾「メソディスト宗派であるにしても偏狭なセクト主義的性格から解放されねばならぬこと」という三原則であった。

第1回生は全員メソディスト宗派の家族からの生徒たち、総数16名であった。リーズ スクールの機関誌 *The Fortnightly* には「1875年2月16日、リーズ スクールに最初の生徒たちの小さな一団が到着した」⁽⁷⁾と記されている。「学校敷地は校長宿舎となる建物を囲んだ起伏する森小立のある私有地といくつかの完成半ばの付属の建物から成っていた。」「多くの教室、広々とした食堂はその当時は建築家の頭の中に描かれた設計図のみであった。現在の校舎、第1校舎と第1、第2寮の壁面は実際建てられてはいたが、“The Original X VI”「16名の第1期生」がそれらを所有することになった時、どちらも維持できる状況ではなかった。」「その後4週間後に正式な開校日のために建築作業は十分な進展を見せ、(校長宿舎から)16名はその前夜第1寮に移り、来賓を迎えるために旗や花環で飾り付けた。」「礼拝式がこの部屋でとり行われ、そして説教の中で学校の目的と期待とが述べ伝えられた。閉式の祈りの後、少年たちを含めて、出席者全員がトランピントン ストリートからケンブリッジ ギルド会議所まで行進し、そこで St. ジョーンズ コレッジ厨房から用意された昼食が出された。昼食には百人を越す来賓が出席した。」「リーズ スクールは驚く程短期間で確固とした土台の上に設立を見たのである。』⁽⁸⁾

リーズ スクールに関して、我々日本人にとり、極めて興味ある歴史的事実について特筆すべきことがある。それはこのスクールが特にその創立から間もない時期に日本から相当数の留学生を受入れ、送り出しているという事実であるが、このことは数ある英国パブリック スクールの中で唯一無二と思われる程に異例であると考えられる。これは日英交流史という観点からも、日英教育史の点からも極めて特異なことである。Dr. Houghton の著に「日本の皇太子(後の天皇陛下裕仁)」という見出しで記されているところによれば以下の通りである。

「日本の王朝の交替に次いで新天皇は宮中廷臣たちの子息たちをイギリスの学校及び、大学へ送り出す政策を打出した。この学校は僅か数年前に創設さ

れていたにも拘らず、いくらかの日本の少年たちがリーズ校へ送られた。その結果この世紀の変わり目までには約20名の日本のリーズ校卒業生が出ることとなった…。皇太子裕仁親王が1921年名誉法学博士号を受けるためにケンブリッジ大学を御訪問の折、裕仁親王は最初にこれ程多くの著名な日本人たちが学んだリーズ校を訪れられた。僅か10分程の短い訪問の間、北A棟、B棟前の中庭を行進するジョン・スターランド大尉指揮の儀じょう兵を閲兵された。』^[9]

この著には儀じょう兵を閲兵されている後の昭和天皇の写真が掲載されている。

上記の初期の日本人留学生についてはリーズ校の正門を入ってすぐ右手にある、この学校の礼拝堂であるチャペル史 *The Chapel: A Brief History* (2006) にその巻末付録として特別の頁を設けて詳述されている。これによってリーズ校にとり、日本からの留学生としてはるばる海を越えて渡り、学び、卒業した日本人留学生がいかに貴重な存在であったかが窺い知れる。これら留学生は明治年間にいち早く英国留学を果して、立派な学業を修めた若者たちであり、後に日本に於ける政治外交等の分野で優れた足跡を残した人々である。その後の日本からの留学生たちの先達として、日英の教育交流史、日英文化交流史の観点からも極めて貴重な存在であったと称すべきである。

チャペル内付家具及び内陣ステンドグラスの下に ‘THE GIFT OF JAPANESE OLD LEYSIANS IN REVERENT MEMORY’ と記されている。又他に1枚のステンドグラスの下に ‘IN MEMORIAM COUNT HIROSAWA B.A., LL.B. NORTH HOUSE. A. 1888-1890’ と記された銘板が付されている。Dr. Houghtonによれば、この後者のステンドグラスは廣澤伯爵が亡くなった折に、遺族によって寄贈されたものという。廣澤伯爵というのは廣澤金次郎(1874-1928)伯爵のことと思われ、長州藩士の父真臣の維新の巧、自身のスペイン・ポルトガル特命全権公使の功によって1884年(明治17年)に伯爵に叙せられ、貴族院議員(明治30.7～大14.7)、総理大臣秘書官等を歴任した人物である。筆者はこれらステンドグラスを今夏このチャペル内で確認することが出来た。

チャペル内陣の壁に以下の銘板にチャペル内付属家具、及び内陣ステンドグラスを贈った14名の日本人リーズ校出身者が記されている。

HON. Y. FUJIMURA (1887-88), S. HINO (1900-02), COUNT K. HIROSAWA (88-90), SHU IMAMURA (96-99), C. KAWAKAMI (88-91), COUNT T. KAWAMURA (88-91), S. KONDO (02-03), T. MASUDA (91-94), HON. N. NABESHIMA (92-95), COUNT N. OGASAWARA (02-04), HON. M. SOYESHIMA (88-91), G. TANAKA (90-93), VISCOUNT T. YAMAUCHI (87-87)

このように1887年から1904年までの留学生たちである。

チャペル史には以下のような記述がなされている。

「初期の時代に於いて、リーズ校は日本からの生徒を入学させるという点で英国の寄宿学校の中で特異であった。ダルウィッチ コレッジ (Dulwich College) が1889年夏に出た一人の日本人の少年の記録を持っているが、ウェストミンスター スクール、イートン コレッジ、或いはウインチェスター コレッジのこの時代の住所氏名録にはいかなる日本人名も見当たらない。又、当初リーズ校が入学させた唯一の外国人生徒は日本人であったことは注目すべきである。1925、1929及び1934年の住所氏名録には6人の日本人が第一次大戦以前に学び、戦後6人を数えた。そのことは1887年から1927年の間に総数26名の日本人の生徒たちが入学したこととなる。1927年以後は第二次大戦後の住所氏名録に次の生徒が表れるのはほぼ50年の間を置いてからのことである。」⁽¹⁰⁾

1887年は明治19年であるが、それはリーズ スクールが設立されて僅か12年のことであったが、このような早い時期にこの学校の存在がどのようにして日本に知られるようになったか、その経緯は極めて興味深く思われる。そもそも誰によってこの学校に関する情報が日本にもたらされたのであろうかという点である。その点を明確にする手立てはないが、このリーズ スクールがケンブリッジ大学に隣接している点が、その点について多少の推測を与えてくれるものであるかも知れない。先に記したように、リーズ スクールがケンブリッジ大学最初のコレッジ、ピーターハウスからほぼ5～600メートルの距離でしかなく、ピーターハウスのすぐ斜め前にはペンブルック コレッジがあり、その先にはすぐコーパスクリスティ、セント キャサリズそしてキングズまでも約1 km位の距離でしかない。更にクレア、ゴンヴィルキーズ、トリニティ、セント ジョーンズと各コレッジまでも僅か1.5km程度

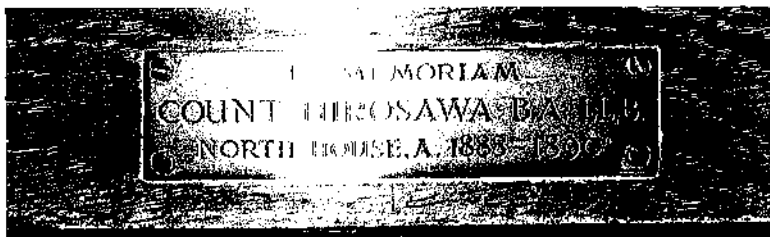
である。このケンブリッジに最初の日本人留学生で、後に文部大臣を務めた菊池大麓が「トリニティイ カレッジに入ったのが1870年代の初めかその前後である」⁽¹¹⁾ という記事が「日本と英国の大学」という題で『タイムズ』に1904年（明治37年）に出されている。但しこれにはその4日後にトリニティではなくセントジョーンズ カレッジであったという修正記事が出されている。⁽¹²⁾ 菊池大麓はそれより先、ロンドン大学の一部であるユニバーシティカレッジの附属高



The Leys School の Chapel



①



②

The Leys School に学んだ初期日本人留学生献上のステンドグラス (①, ②は廣澤伯爵に因む)

校に相当する「ユニバーシティーカレッジ スクールを1873年（明治6年）に卒業している。」⁽¹³⁾ 菊池はその後ケンブリッジ大学とロンドン大学に進学するが、ケンブリッジに入学することが1873年5月段階で許可されていたことによっても、リーズ スクール開校の1875年はケンブリッジ在籍時であったと推測される。又、菊池と同じ1873年11月にトリニティ コレッジへ入寮し、ケンブリッジへの入学許可を得た者に村上敬次郎という人物もいたが、彼は1874年には日本に帰国している。⁽¹⁴⁾ このことからすればリーズ スクール開校当初にはやはり菊池大麓のみがケンブリッジにいたと思われ、この菊池を通してリーズ スクールについての情報が日本に伝えられていた可能性があろうかと推測される。菊池は「セント ジョーンズ カレッジの最初の中庭を囲む…「F」という一角の二階に住んで」「1873年10月から卒業した頃までそこに住んでいた」とされ、「カレッジの居住者リストでは1876年には別人の名前が記入されている。」⁽¹⁵⁾

Good-bye, Mr. Chips はイギリスの良き伝統と精神性をその教育に於いていかに受継いで、その建学の精神に培われた優れた人材を育て、世に送り出そうとするパブリック スクールの一つ、リーズをこよなく愛し、そこに半生を捧げた一教師の物語であった。この小説に描かれる様々なエピソードを通して、英国のパブリック スクールの教育と学校生活の一端を垣間見ることが出来、それによって英国の文化の貴重な一面に触れることが可能となっている。この物語はその意味で、英国の教育と文化研究にとっての得難い資料である。

この小論の結びに主人公チップス先生の愛すべき又忘れ難いその風貌と人となり、そして信念を最も良く描き出していると思われる箇所を引用しておきたい。

“He found that his pride in Brookfield reflected back, giving him cause for pride in himself and his position. It was a service that gave him freedom to be supremely and completely himself. He had won, by seniority and ripeness, an uncharted no-man's-land of privilege; he had acquired the right to those gentle eccentricities that

so often attack schoolmasters and parsons. He wore his gown till it was almost too tattered to hold together; and when he stood on the wooden bench by Big Hall steps to take call-over, it was with an air of mystic abandonment to ritual. He held the School-list, a long sheet curling over a board; and each boy, as he passed, spoke his own name for Chips to verify and then tick off on the list. That verifying glance was an easy and favourite subject of mimicry throughout the School—steel-rimmed spectacles slipping down the nose, eyebrows lifted, one a little higher than the other, a gaze half rapt, half quizzical. And on windy days with gown and white hair and School-list fluttering in uproarious confusion, the whole thing became a comic turn sandwiched between afternoon games and the return to classes.”

「彼はブルックフィールドに対する自らの誇りは翻せば自分自身と自らの職分に対する誇りゆえであると感じていた。それは実に見事にそして完璧に自分自身となり得る自由を彼に与えてくれる仕事であった。彼は年の功と円熟とが合埃って、前人未到の特権領域を勝ち得ていた。彼は教師や牧師の職にある者たちがしばしば陥入りがちな穏やかな奇異さに対しても当然の権利を得ていたのである。彼は教師用のガウンを殆んどボロボロにちぎれて、まともに着ていられない位まで身にまとっていた。そして彼が点呼を行うために講堂の階段の傍の木製のベンチに立つそのいで立ちは儀式に神妙に身を委ねている風であった。彼は下敷の厚紙に丸めた一枚のひよろ長い出席簿を持っていた。そして少年たちが一人一人通りすがりに自分の名前を告げると、チップスが確認に名簿にチェックの印を付けた。その確認の時のチップスの目付きというものが学校中で皆が気軽に真似て受けている仕草となっていた—鋼鉄縁のメガネが鼻からずり落ちそうになりながら、片方の眉毛だけをやや高く吊り上げて、半ばうっとりしているような、又半分いぶかしそうな、見つめ方をした。そして風の強い日にはガウンも白髪も名簿も滅法派手に吹きなびかせているそんな格好全てが、午後の競技の時間と授業に戻る間に差しはさまれた一場の喜劇となっていた。」

註

- (1) Ian Anstruther, *Dean Farrar and Eric* (London: Hagerston Press, 2002), p.11.
- (2) Nigel Goodman, *Eton College* (Pitkin Unicrome, 2000), p.14.
- (3) Geoff and Pat Houghton, *Well-regulated minds and improper moments* (Cambridge: The Governors of The Leys School, 2000), p. iv.
- (4) *Ibid*, pp.65-69.
- (5) *Ibid*, pp.244-247.
- (6) *Ibid*, p.7.
- (7) *Ibid*, p.8.
- (8) *Ibid*, pp.9-11.
- (9) *Ibid*, p.199.
- (10) John Harding, *The Chapel: A Brief History* (Cambridge: The Governors of The Leys School, 2006), pp.36-37.
- (11) 小山騰『破天荒く明治留学生列伝』講談社1999, p. 12.
- (12) 前掲書 p. 15.
- (13) 前掲書 p. 17.
- (14) 前掲書 p. 84.
- (15) 前掲書 p. 89.

なお、原作の英文は以下より引用した。

Good-bye, Mr. Chips by James Hilton (London: Hodder & Stoughton, 1959)

この小論中の James Hilton, W.H. Balgarnie の写真資料、彼らに関する記述の抜粋引用については、*Well-regulated minds and improper moments* の著者 Dr. Houghton に転写、記述の許可を与えられた。このことに深甚の感謝を記すとともに、筆者に Dr. Houghton への紹介の労をとって下さった、ケンブリッジ大学ペンブルック コレッジ フェロウ Dr. Colin Wilcockson に併せて深甚の謝意を記したい。他の写真資料は全て筆者自身の撮影によるものである。